文部科学省
地(知)の拠点
文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（平成25年度採択）

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

2018(平成30)年度　成果報告書

中部大学

はじめに

中部大学は、建学の精神「不言実行、あてになる人間」の下、地域社会に貢献できる人材の育成を進めるため、平成 25 年度～平成 29 年度まで、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（ＣＯＣ事業）に採択された「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」を展開してきました。

この事業の目的は、中部大学が地域の知の拠点として、地域と連携した知の創造及びその継承を通じて、地域に目を向け問題解決に取り組むことができる人材としての地域創成メディエーターを育成するとともに、地域再生、地域活性化に貢献することです。

この目的を達成するため、地域関連の正課教育「地域共生実践」と地域関連科目の授業を実施するとともに、本学と地域（春日井市、春日井商工会議所、高蔵寺ニュータウン等）が連携して、報酬型インターンシップ、高齢者・学生交流 Learning Homestay、シニア大学(中部大学アクティブアゲインカレッジ)、キャンパスタウン化、生活・住環境を考えるまちづくり、コミュニティ情報ネットワークの 6 事業を展開してきました。

平成 30 年度は、上述の文部科学省の事業を継承し大学独自で取り組む事業として、中部大学ＣＯＣ推進室という新たな組織の下で、ＣＯＣ事業を再スタートさせました。事業内容は、昨年度までのものと余り変わりはありませんが、昨年度までの活動成果を当初掲げた達成目標と照らし合わせて検証した上で、すでに役割を終えた一部の事業は整理縮小しました。しかしながら、一方では、地域を春日井市に限定することなく、連携活動の範囲が拡大したものもあります。また、報酬型インターンシップや高蔵寺ニュータウンでの地域連携住居など、これまでの取り組みがさらに発展したものもあります。

事業目的の一つである地域創成メディエーターの育成については、今年度も昨年度と同様にルーブリック評価を用いて、その達成要件を審査し、約 100 名の学生を地域創成メディエーターに認定する予定となりました。

本成果報告書は、平成 30 年度のＣＯＣ事業において、実施した各種活動とその成果をまとめたものであります。本報告書の内容を学内外に広く発信して、本学のＣＯＣ事業に関するご理解を深めていただくとともに、次年度以降の地域連携教育・研究活動に活かしていきたいと考えています。今後とも、これまでのＣＯＣ事業の経験と成果を踏まえて、大学独自の地（知）の拠点事業（地域連携共育事業）を継続し、その人材育成目標及び地域貢献目標を確実に達成すべく努力を重ねたいと存じています。学内外の多くの方々には引き続きご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 31 年 3 月

中部大学研究戦略部門ＣＯＣ推進室長
松　尾　直　規

−目　次−

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

１．概要

（１）目的・目標・概要図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

（２）実施体制・メンバー表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

２．活動報告

（１）全体の活動成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

（２）ワーキンググループ等報告

①　正課教育ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

②　地域連携プログラムＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
（報酬型インターンシップ・高蔵寺ＮＴキャンパスタウン化）

③　コミュニティ情報ネットワーク事業ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・ 35

④　生活・住環境を考えるまちづくりＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・ 37

⑤　高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

⑥　ＣＡＡＣ運営委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

３．新聞記事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

１．概　要

（１）　目的・目標・概要図

１．概要

（１）-1　目的

中部大学（以下本学）の文部科学省「地（知）の拠点整備事業」:『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業（以下本事業)』は平成 30 年 3 月に 5 年間の事業を終了したが、平成 30 年度からは、この事業を大学独自で取組む「地（知）の拠点事業」として継承した。ここでは、この事業目的の概要をあらためて記す。

本事業は初年度の報告書にも述べられているように**本学が「地域課題の解決」および「地域に役立つ人材養成」を目的とする地域再生・発展のための地（知）の拠点となる**ための**大学改革事業**である。またその**改革の成果を地域社会に還元し、地域社会に貢献していくことを目的**としている。

本学はその基本理念として、「『不言実行、あてになる人間』を信条とし、豊かな教養、自立心と公益心、国際的な視野、専門的能力と実行力を備えた、信頼される人間を育成するとともに、優れた研究成果をあげ、保有する知的・物的資源を広く提供することにより、社会の発展に貢献する。」こととしており、その社会貢献上の使命として、「さまざまな社会活動に参画し、大学が保有する知的・物的資源を活用することによって、地域を中心とする社会の福利向上と発展に貢献する」ことを学内外に明確にしており、地域貢献・地域連携は本来、本学の使命でもある。

すなわち本学は建学の精神「あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として本事業を遂行しており、社会・産業界の中で地域にも目を向けて「行動できる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「頑張れる人間」「信頼できる人間」としての学生育成を図り目指している。本学はこの事業を通してさらに一層地方大学の社会的使命を探究し、持続可能な未来社会の創造とその教育のあり方をさらに力強く追求する。

Ⅰ．全体としての目的

本事業全体の目的をさらに具体的に述べれば、地域にも目を向けて地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指し、現代社会の主役である高齢者にとって安心・安全で豊かな社会づくり、まちづくりを春日井市に展開する。その成果を春日井地域に還元し、都市づくりを進める。さらに、その成果と知識を広く日本社会全体に拡大することで日本の発展に貢献していく。こうした実践活動を学生自身が担っていくことで、学生自身が実践的知識を深め、支援技術を学び、前述の地域であてになる人材に育っていく。

Ⅱ．教育上の目的

地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指す。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として**新たに『地域共生実践』を設置し**、学部・学科にも地域志向関連科目を設置する。こうして基礎教育と専門教育を交互に

発展的に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに**最終的に中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター』”の育成**を目的とする。

②「地域連携プログラム」

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に学生を教育する報酬型インターンシップ型の就労システムを構築する。また、「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」といった地域貢献活動においても学生を社会貢献の実践に参加させ、高齢者と交流させることで、高齢化社会の地域課題を理解し、積極的に課題解決策を考える能力を涵養することも目的としている。

③「コミュニティ情報ネットワーク事業」においては地域の医療情報を共有するシステム構築や、地域への有益情報発信を目指した。

④「生活・住環境を考えるまちづくり事業」でも学生を研究活動に参加させることで、地域の課題を解決していく能力の育成にも資することが目的ともなっている。

⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅へのLearning Home Stay（ＬＨＳ）およびLearning Home Visit」では地域での高齢者問題を身近に感じることから、問題解決能力の育成を目指した。

⑥「シニア大学（中部大学アクティブアゲインカレッジ：ＣＡＡＣ）」では地域に開かれた大学としてシニア向けの学びの場を提供し、その学びを通して地域に貢献できるアクティブシニアの育成を目指した。

Ⅲ．研究上の目的

地域活性化の課題研究として以下の研究の推進を目的とする。

③「コミュニティ情報ネットワーク事業」

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がＩＴ化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を進める。

④「生活・住環境を考えるまちづくり事業」

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域の住民が安心して快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する開発研究を行う。

その他社会貢献活動関連研究

「高齢者-学生交流・ＬＨＳ事業」や「シニア大学」の開設などの社会貢献に関連しながら、地域の課題をさまざまな観点から調査研究し、地域活性化と高齢者支援の手段を見いだしていくことを目的とした研究活動も並行して行う。

Ⅳ．社会貢献上の目的

改革の成果を春日井を中心とした地域に還元し、地域の再生・活性化を支援するため、以下の地域社会貢献を目的とする。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

地域に役立つ人材を教育機関として養成し地域に送り出すことで社会に貢献する。地

域の課題を現実的に理解し、解決のために行動を起こすことができる“あてになる人材”を養成する。そして地域のコミュニティ活動の中心人物であり、リーダーとなることのできる知識と問題解決能力を持ち、良好な対人関係を維持できる人材を地域に送り出す。これは教育機関として重要な社会貢献活動である。さらに本事業では、春日井市の課題克服のための解決策を中部大学が軸となって展開し、現代社会の最重要課題である高齢化社会の以下の課題解決に挑戦する。

⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅へのLearning Home Stay（ＬＨＳ）」
高齢世帯や独居高齢者の見守りや生活支援を目的に若者による高齢者との交流や同居活動を進める。

⑥「シニア大学（中部大学アクティブアゲインカレッジ：ＣＡＡＣ）」
高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的に実践教育を行う。

その他、③「コミュニティ情報ネットワーク事業」、④「生活・住環境を考えるまちづくり事業」でも研究活動を通して地域社会を安全・安心で便利なものとしていくことで地域社会に貢献していく。

（1）-2　目標

昨年度で文部科学省補助金事業は終了したが、前項の目的を達成するため、今年度の目標を以下のように設定した。

Ⅰ．全体

①　ＣＯＣ推進委員会委員とワーキンググループの統合・再編
各事業活動リーダー・副リーダーおよび各学部代表委員からなるＣＯＣ推進委員会の機能を維持し、活動内容に応じてワーキンググループを一部、統合・再編し（実施体制・メンバー表参照）、本事業全体の推進にあたる。

②地域創成メディエーターの育成
平成 27 年度までの立ち上げ期間から、H28 以降、具体的アクションプランを実施し、今年度も引き続き地域創成メディエーターの輩出を図る。

③内部評価委員会の開催
学長を委員長とする学部長・研究科長会のメンバーに春日井市をオブザーバーに加えて内部評価委員会を開催し、事業活動の報告とそれに基づいて評価を受ける。

Ⅱ．教育

教育活動としては地域連携教育の推進と報酬型インターンシップの確立を目指す。

①地域連携教育改革を実施し、教育システムの構築
１）地域共生実践を春学期３講義・秋学期５講義、並列開講の運営。担当教員・協力者の勧誘と増員。
２）地域創成メディエーターへの導き。
３）地域創成メディエーター学生発表会（＋エクスプレッション）を開催し、地域創

成メディエーターをルーブリック評価に基づき認定する。

②報酬型インターンシップ制度の維持・発展

１）春日井商工会議所との連携強化。

２）特命教授の会の開催。

３）学生への説明会の開催。

地域連携住居への入居者の促進

４）高蔵寺ＮＴ内の空物件への学生の入居促進。

５）中部大学ＫＮＴ創生サポーターズＣＵ$^{+}$（ＣＵ$^{+}$）による地域貢献活動の活性化。

Ⅲ．研究

研究活動としてコミュニティ情報ネットワークの構築と高蔵寺ニュータウンを中心としたまちづくり活動を展開する。

③地域住民に役立つ情報発信

１）シニア大学の講義映像配信システムの開発。

２）ＮＰＯ活動情報と地域への有益情報発信。

④春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発を行う。

１）高蔵寺ニュータウンの課題と問題解決法について住民との意見交換会を実施する。

２）まちづくり講演会を開催し、全学部の学生に「まちづくり」の意義と参加方法について学ぶ機会をつくる。

３）まちづくり勉強会（学内）、タウンウォッチング（学外）を実施する。

４）正課並びに自主活動を強化する。

Ⅳ．社会貢献

高齢者・学生の交流活動を実施し、社会貢献活動として高齢者-学生交流・Learning Home Stay（ＬＨＳ）事業、シニア大学、高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化の各活動を軌道に乗せる。

⑤高齢世帯および独居高齢者の見守りや生活支援を目的に、若者による高齢者との交流や同居を実践する。

１）ＫＣＧサークル（地域発の健康教室）の運営サポート。

２）地域連携教育セミナー、ＬＨＶ体験報告会・ホストファミリー懇談会の実施。

３）ＬＨＶの実施。

⑥高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア大学を運営する。

１）３・４期生の後期授業（春学期）を行い、３期生の修了式を行う。

２）５期生の入学式を行い、４・５期生の授業（秋学期）を行う。

３）カリキュラムの改変・充実を図る。

４）ＣＡＡＣ公開講座を開催する。

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

春日井市の知の拠点＝**中部大学**

学部：7学部（29学科）、大学院：6研究科
学生数：約10000人、教員数：約500人

地域の方々と学生、地域と大学がキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現する。

中部大学は平成26年に開学50周年を迎える。中部大学ならやれる！中部大学が成功させる！

正課教育

正課教育との連携に基づいた課外教育

“らせん”構造
複合的学修システム

あてになる人間の育成
中部大学認定
＜地域創成メディエーター＞

地域との関り体験を通して他者を理解し、自身の価値観をみつめる

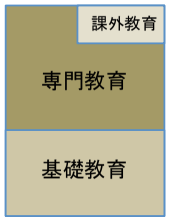
春日井市

- 自治体
- 市民
- 地域
- 企業
- 学校（小・中・高）
- その他

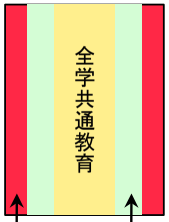
要請・課題・ニーズ

教育プログラム体系の新展開

従来の構成



新たなプログラム構成



正課教育との連携に基づいた課外教育

学部・学科専門科目

本プログラムでは、全学共通教育科目に『地域共生実践』（2単位）を新設する。さらに学部・学科において、地域連携に関する科目・演習等を設置する。

本プログラム推定参加学生数：
25年度：約50名、26年度：約80名
27年度：約400名
28年度：約600名
29年度：約800名
（以降、順次増加する。）

報酬型インターンシップ
生活・住環境を考えるまちづくり
キャンパスタウン化
高齢者・学生交流 Learning Home Stay
シニア大学（CAAC）
コミュニティ情報ネットワーク
<課題>認定基準の明確化

春日井市にある高蔵寺ニュータウンを課題解決のモデル地域と位置づけ、包括的な人材育成と地域活性化事業を中部大学と自治体が協力して実施する。
事業開始2年を目処に、本モデルを春日井市全域に発展させる予定である。
事業終了時には、春日井市が活性化され、人材が育つ。

＜教育改革＞
中部大学では、平成20年度以降大幅な教育改革を進めてきた。本事業では、更なる教育改革として、全学共通教育及び学部の正課の地域関連科目を導入した**『新しい教育課程』**を実施する。さらに、全学総合教育科を発展的改組し、**『全学総合COC教育科』**を新たにスタートさせる計画である。

本プログラムで育成した、中部大学認定『地域創成メディエーター』が、人と人との絆をつくる介在をし、活力あるコミュニティを形成する。

中部大学のCOCとしての目標

- ■“地域”と言う名のシャワー（刺激）で学生を育てる。
- ■地域だけでは解決できない課題を、大学の持つシーズを活かして、地域と協働で取り組む。
- ■“まちづくり”の不可欠な資源が次代を担う若者である。この意識を高め、地域と共に育てる。
- ■地域において優しい心配りができる、真のリーダー養成を目指す。
- ■地域からあてにされる大学を目指す。
- ■地域連携において、春日井モデルを明確にし、このモデルを全国に伝える。

まちづくりを通して、共に学び（共学）・共に育つ（共育）!!

地域創成メディエーターにおけるアウトカムの例

創造
- •持続可能な日本社会を創造するために有用な新しい教育構造を提示できる
- •世代間交流により意図的・政策的・教育的プログラムが創造できる
- •新たな視点による「まちづくり」の意義を創造する事ができる
- •高齢者対策にとって積極的で画期的な取り組みができる
- •新たな価値を創造する事ができる
- •情報共有システムに必要な技術を調査することができる
- •調査した技術を整理することができる
- •老若男女が同一の環境で学ぶ場を提供できる
- •学生本人が人生プランを創造することができる

協働
- •春日井市の活性化に寄与できる
- •プロジェクトメンバーの一員として，システムを運用できる
- •地域の方々と対話・議論し，システムの在り方を議論できる
- •地域社会を支える担い手としての使命感を育成することができる
- •異世代の結束は地域を活性化し、高齢社会問題の多くを解決できる
- •高齢者と若者の相互理解が、異なる世代同士の結束をもたらすことができる
- •共に支え合う、共に学び合う、共に理解し合うことを通じて社会に参画することができる

自立
- •社会人としての考え方や能力を伸ばすことができる
- •一人一人が多様な個性・能力を伸ばす事ができる
- •対人関係形成能力を改善し自立心を養うことができる
- •世代間交流により知的にも道徳的にも成長することができる
- •地域貢献することにより目的意識や学習意欲を高めることができる
- •世代を超え、相互に切磋琢磨し、いたわりの心と自立心を養う事ができる
- •地域特有の課題を見つけ出しその解決策を考える能力を伸ばす事ができる

学内の実施体制

学長主導の基、COC担当理事(兼)副学長を置き、本取組みを統括し、推進する。

協力・提案・シーズ

（２）実施体制・メンバー表

（２）実施体制・メンバー表

本事業を全学的に推進・実施するために以下のように学長を総括責任者とし、全学体制を構築。実際の事業は、全学部からの委員を含むＣＯＣ推進委員会を設置し推進にあたっている。またＣＯＣ推進委員会内に活動毎に６のワーキンググループを設け各活動を展開し、事務部門は研究推進事務部ＣＯＣ推進課で事業全体の事務的管理にあたっている。（以下、中部大学ＣＯＣ事業体制図 および ＣＯＣ・ＷＧメンバー表　参照）

2019年3月現在

中部大学 COC事業 体制図

学 長

副学長

COC推進委員会

議長（COC推進室長）	松尾　直規
副学長	杉本　和弘
副学長	竹内　芳美
COC推進室副室長	櫻井　誠
工学部	磯部　友彦
経営情報学部	伊藤　佳世
国際関係学部	伊藤　正晃
人文学部	林　　上
応用生物学部	小川　宣子
生命健康科学部	戸田　香
教育実習センター	宮川　秀俊
生命健康科学部	伊藤　守弘
生命健康科学部	對馬　明
生命健康科学部	堀　文子
生命健康科学部	藤丸　郁代
生命健康科学部	竹内　環
工学部	保黒　政大
工学部	松山　明
人文学部	末田　智樹
応用生物学部	上野　　薫
教育戦略部門入学センター長	佐野　　充
総合工学研究所	林　良嗣
理学療法実習センター	富永　敬三
教育戦略部門キャリア部長	細川　健治
研究推進事務部長	石井　和則
学生教育部　学生支援課	大竹　雄平
学生教育部　教務支援課	出口　良太
渉外部　エクステンションセンター	種村　育人
学園広報センター事務部　制作課	裁　　香織

関係部署

学生支援課
教務支援課
キャリア支援課
ｴｸｽﾃﾝｼｮﾝｾﾝﾀｰ
制作課
各学部事務室

研究戦略部門
COC推進室

室長	松尾　直規
副室長	櫻井　誠

研究推進事務部
COC推進課

部長	石井　和則
課長	丹羽ゆかり
課員	羽山　直子
課員	林　　琴江
課員	早川　裕子
課員	上甲　詩帆

平成30年度　ＣＯＣ・ＷＧメンバー

正課教育ＷＧ（活動番号①）

委員長	上野　薫	（応用生物学部　環境生物科学科　准教授）
副委員長	伊藤　守弘	（生命健康科学部　生命医科学科　教授）
委　員	竹内　環	（生命健康科学部　助教）
同	山羽　基	（工学部　建築学科　教授）
同	伊藤　佳世	（経営情報学部　経営総合学科　准教授）
同	羽後　静子	（国際関係学部　国際学科　教授）
同	小川　宣子	（応用生物学部　食品栄養科学科　教授）
同	牧野　典子	（生命健康科学部　保健看護学科　教授）
オブザーバー	松尾　直規	（ＣＯＣ推進室長）
（事務局）	丹羽ゆかり	（ＣＯＣ推進課長）

地域連携プログラムＷＧ（活動番号②）

※報酬型インターンシップＷＧと高蔵寺ＮＴキャンパスタウン化ＷＧを統合

委員長	伊藤　守弘	（学生部長補佐／生命健康科学部　生命医科学科　教授）
副委員長	櫻井　誠	（ＣＯＣ推進室　副室長／工学部　応用化学科　教授）
委　員	花井　忠征	（学生部長／現代教育学部　幼児教育学科　教授）
同	羽後　静子	（国際関係学部　国際学科　教授）
同	武田　明	（生命健康科学部　臨床工学科　教授）
同	横手　直美	（生命健康科学部　保健看護学科　准教授）
同	丹羽ゆかり	（ＣＯＣ推進課長）
同	大竹　雄平	（学生支援課長）
同	田中　順	（学生支援課　担当課長）
オブザーバー	松尾　直規	（ＣＯＣ推進室長）
（事務局）	細川　貴史	（学生支援課）
同	殿垣　博之	（学生支援課）

コミュニティ情報ネットワーク事業ＷＧ（活動番号③）

委員長	保黒　政大	（工学部　宇宙航空理工学科　教授）
副委員長	富永　敬三	（理学療法実習センター　講師）
委　員	前田　和昭	（経営情報学部　経営総合学科　教授）
同	宮下　浩二	（生命健康科学部　理学療法学科　教授）
（事務局）	丹羽ゆかり	（ＣＯＣ推進課長）

生活・住環境を考えるまちづくりＷＧ（活動番号④）

委員長	磯部　友彦	（工学部　都市建設工学科　教授）
副委員長	松山　明	（工学部　建築学科　准教授）
委　員	岡本　肇	（工学部　都市建設工学科　准教授）
同	余川　弘至	（工学部　都市建設工学科　講師）

同	横江　彩	（工学部　建築学科　講師）
同	行本　正雄	（工学部　機械工学科　教授）
同	尾鼻　崇	（人文学部　コミュニケーション学科　講師）
同	林　良嗣	（総合工学研究所　教授）
同	小川　宣子	（応用生物学部　食品栄養科学科　教授）
（事務局）	丹羽ゆかり	（ＣＯＣ推進課長）

高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ（活動番号⑤）

委員長	戸田　香	（生命健康科学部　理学療法学科　教授）
副委員長	堀　文子	（生命健康科学部　作業療法学科　准教授）
委　員	長島　万弓	（応用生物学部　食品栄養科学科　教授）
同	野田　明子	（臨床検査技術教育・実習センター　教授）
同	三摩　真己	（人文学部　コミュニケーション学科　教授）
同	末田　智樹	（人文学部　歴史地理学科　准教授）
同	尾方　寿好	（生命健康科学部　スポーツ保健医療学科　准教授）
同	矢澤　浩成	（理学療法実習センター　講師）
同	谷利　美希	（作業療法実習センター　助教）
同	松村　亜矢子	（生命健康科学部　講師）
同	大竹　雄平	（学生支援課長）
同	殿垣　博之	（学生支援課）
オブザーバー	櫻井　誠	（ＣＯＣ推進室　副室長／工学部　応用化学科　教授）
（事務局）	丹羽ゆかり	（ＣＯＣ推進課長）

ＣＡＡＣ運営委員会（活動番号⑥）

委員長	松尾　直規	（カレッジ長／ＣＯＣ推進室長）
副委員長	對馬　明	（コース長／生命健康科学部　理学療法学科　教授）
委　員	羽後　静子	（コース長／国際関係学部　国際学科　教授）
同	櫻井　誠	（ＣＯＣ推進室　副室長／工学部　応用化学科　教授）
同	林　　上	（人文学部　歴史地理学科　特任教授）
同	末田　智樹	（人文学部　歴史地理学科　准教授）
同	藤丸　郁代	（生命健康科学部　スポーツ保健医療学科　准教授）
同	甲田　道子	（応用生物学部　食品栄養科学科　准教授）
同	伊藤　正晃	（国際関係学部　国際学科　講師）
同	種村　育人	（エクステンションセンター次長）
同	出口　良太	（教務支援課長）
同	大竹　雄平	（学生支援課長）
同	渡邉　真和	（キャリア支援課長）
（事務局）	丹羽ゆかり	（ＣＯＣ推進課長）
同	林　琴江	（ＣＯＣ推進課）

２．活 動 報 告

（１）全 体 の 活 動 成 果

２．活動報告

（１）全体の活動成果

事業活動はＣＯＣ推進委員会ならびに活動毎のワーキンググループにより行なわれてきたが、それらに共通する課題や統括する活動はＣＯＣ推進室長を中心にＣＯＣ推進委員会等ＣＯＣ全体で取り組んできた。それらの成果は以下のようである。

１）中部大学ＣＯＣ事業のスタート

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」としての 5 年間を終了し、平成 30 年度から中部大学ＣＯＣ事業として再スタートをした。7 つあったＷＧを 6 つに統合し、正課外活動を春日井市外へも広げて認定した。

２）ＣＯＣホームページの拡充

各ワーキンググループの活動内容を中心に適宜更新し拡充した。

３）中部大学フェアのブース出展

9 月 13 日（木）開催の中部大学フェアにＣＯＣ事業の紹介ブースを出展した。

４）ＣＯＣ推進委員会の開催

各ワーキンググループリーダーと各学部代表委員などからなるＣＯＣ推進委員会の構成員、開催回数を見直した。委員は、委員長以下 37 名から 29 名へ、開催は年 7 回から 5 回へと変更し、新体制のＣＯＣ推進委員会が各活動の報告と重要事項の審議にあたった。

５）地域創成メディエーターの育成

平成 27 年度までの立ち上げ期間から 28 年度は COC 事業における地域創成メディエーターの本格的実施年度となり、以降、平成 30 年度も前年度同様に実施した。

(1) ＣＯＣ事業における地域創成メディエーターの人物像

本学の建学の精神「不言実行、あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として、ＣＯＣ事業では「地域創成メディエーター」の育成を行っている。社会･産業界は、都市だけでなく「地域にも目を向けられる人材」が求めている。即ち「自ら行動できる人間」「考えられる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「がんばれる人間」「信頼できる人間」「地域にも目を向けられる人間」としての学生育成を図っている。学生が地域社会に触れると「なぜ」「どうして」とこれまでの同学年の学生仲間関係とは違う驚き等を感じ、対処法や改善策を考えると自然と「考える力」が熟成される。

(2) 地域創成メディエーター大幅育成のための具体的アクション

以上の認識の下に、ＣＯＣ推進委員会、事務局が一丸となって、他部門とも密接な協力の下に以下に示すような具体的なアクションプランを作り、着実に実施し、地域創成メディエーターの育成を図った。

①　正課外教育事業の体験を１つ以上とする。

②　オリエンテーション時に学生(新入生から現３年生)に対して、ＣＯＣ地域創成メディエーター取得を促すチラシ（別紙①参照）を配布し、学生への周知を図った。

③　推進委員は担当する正課科目の講義にて地域創成メディエーターの取得を学生に促した。

④　教務支援課に依頼し、資格取得に必須となる正課科目を取得あるいは履修中の学生を学科ごとにリストアップした。

⑤　各推進委員に学科毎(場合により学部)の上記リストを渡し、各学科の３年生指導教員とタイアップしてリストの学生に地域創成メディエーターを取得するように積極的に促した。

⑥　副委員長が事務局と連携し、⑤のフォローアップを行った。

⑦　推進委員および「動く」の活動担当者から、125 名もの地域創成メディエーター候補の学生を選出いただき、「動く」の課外活動のフォローアップを行った。

⑧「動く」の活動について、昨年度までの地域志向教育研究の活動や春日井市以外での活動から申請があり、推進委員会に諮り承認した。これまで認定済みの 24 活動に加え、13 活動を新規追加し、「動く」の活動は 37 となった。

⑨　大学側の受講人数制限(例　キャリア教育科目(自己開拓、社会人基礎知識))により、本人の意思とは関係なく「学ぶ(正課教育)」を履修できない希望学生には、特別課題レポートを提出させて、地域創成メディエーター資格条件の「学ぶ」をクリアとする特別措置を認めた。

⑩　地域創成メディエーター育成のルーブリック評価で、育成する人材像を明確にした。（別紙②参照）

(3) 地域創成メディエーター取得学生の大幅増

以上のアクションプランを全体として一丸となり、着実に実施したことにより、2 月 19 日に当日の欠席者 1 名を除く地域創成メディエーター候補の学生 94 名の発表会を開催、当日公的理由により発表が困難である学生 15 名は 3 月 5 日に発表会を行った。

この結果、立ち上げ期間の H26 年度 4 名及び H27 年度 5 名から、本格実施となった H28 年度は 144 名、H29 年度からはルーブリック評価に基づき「地域創成メディエーター」の資格を 132 名、H30 年度は 109 名の学生に授与できる運びとなっている。

2019 年度以降も引き続き地域創成メディエーターの育成数を増やしていく予定である。

６）地域創成メディエーター学生発表会「＋エクスプレッション」開催（別紙③参照）

2 月 19 日（火)・3 月 5 日(火)の２回に分けて、それぞれ本学不言実行館アクティブホールとスチューデント・コモンズにおいて、中部大学地域創成メディエーター学生発表会「＋エクスプレッション」を開催した。

地域創成メディエーター資格認定の最終課題「＋エクスプレッション」は講義での規定単位取得に加え、キャンパスを地域に広げた課題体験に参加・実践した学生たちが、まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して現場で解決策を考えて取り組ん

だ過程と成果を発表。口頭発表 4 名、ポスター発表 105 名の学生が地域創成メディエーター候補生となった。2 月 19 日の参加者は、一般市民 32 名、教職員 52 名、学生 12 人が来場した。

参加者にアンケートを依頼し、34 名から回答を得た。全体の感想について約 94%が「とても良かった・良かった」と回答した。（別紙④参照）

７）学生の活動報告

平成 30 年 3 月 23 日(金)の学位記授与式において、卒業生代表として生命健康科学部スポーツ保健医療学科の藤野慎也が謝辞を述べた。（別紙⑤参照）

８）学部長会等からなる内部評価委員会の開催

1 月 22 日（火）に学部長・研究科長会構成員からなる内部評価委員会が開催され、平成 30 年度事業活動の内部評価が行われた。オブザーバーとして春日井市にも出席いただいた。

９）採択他大学との交流と活動

(1) ＣＯＣ事業採択校との情報交換会（岐阜大学はじめ中部圏 17 大学）

10 月 18 日(木)に岐阜大学で中部圏 17 大学のＣＯＣ採択校が参集して情報交換会が開催された。

(2) 中部地区ＣＯＣ事業採択校「学生交流会」に参加

3 月 1 日(金)「みんなの森ぎふメディアコスモス」にて、岐阜大学を幹事として中部地区 17 大学と香川大学（特別参加）が集結し、各大学の代表学生が地域での活動やその成果を発表した。本学からは、応用生物学部の金城星太が「“もったいない”をなくしたい」と題した発表を行い、ポスターセッションにも参加した。

別紙①　地域創成メディエーター チラシ

文部科学省 地(知)の拠点

中部大学
学長認定
資格

春日井のまちがキミのキャンパス。

地域創成メディエーター

自分らしい人生や、キャリアビジョンを描く第一歩！

「地域創成メディエーター」資格とは、在学中から社会経験を積み、
社会で生きる力を身につける、中部大学式「人材育成体験プログラム」。
春日井のまちで、地域の人々と共に地域のさまざまな問題解決への取り組みを経て
「行動できる人」「自ら道を切り拓く人」「頑張れる人」「信頼できる人」として
中部大学が自信を持って認定し、推薦できる学生の証です。

学ぶ

授業で
知識を習得
［正課］

自立した社会人として地域の人々と関わるために、
地域社会の多様な背景を知り、専門的な知識を身につけよう。

Aの科目から1単位以上、
B～C科目から各2単位以上、合計10単位以上 必須

A キャリア教育科目

「自己開拓」
グループワークによる実習。協同作業を通じて自分をより深く知ることができます。

「社会人基礎知識」
自分の適性に合う職種や企業を選ぶための基礎的な知識を習得します。

B 特別課題教育科目

必修 **「地域共生実践」**

選択
「持続学のすすめ」
「地域の防災と安全」「地球を観る」
「人類と資源」「グローバル環境論」

C 地域関連科目

メディエーター資格取得の動機や地域の理解に役立つ科目を自由選択
選択した科目で会得した知識が、地域課題へどう繋がったか、「関連」や「動機」、「成果」を表現できればOKです。

※地域関連科目の詳細は事務局まで

動く

課外体験に
参加・実践
［課外］

キャンパスを春日井市に広げて、まちの再生や地域活性化など、
特有の課題に取り組む現場で解決策を考えて実践にあたります。

1プロジェクト以上に参加 必須

プロジェクト活動の一例

高齢者との交流	イベントの運営を通して地域貢献	春日井のまちを知るまちづくりを考える	技術を身につけながら地域貢献
●シニア大学の講義を補助 ●世代間交流会への参加 ●ラーニングホームヴィジットでシニア宅の訪問や共同生活を体験	●高校の体育系部活の運営補助 ●子育て相談会の運営補助 ●街のイベント情報誌「まちこみゅニュース」の編集・発行	●高蔵寺ニュータウン地域連携住居への入居と地域交流イベント参加 ●障害者スポーツのすすめ ●森の健康診断	●報酬型インターンシップ ●NPO活動情報発信Webサイトの作成 ●医療情報共有システムの開発・提供 ●地域の健康教室の活動支援

※そのほかさまざまな活動が計画されています。プロジェクトの詳細は事務局まで

参加者VOICE

論理的に考える力が鍛えられた。

就職の面接で履歴書に記載したメディエーターについて質問された。発表資料を再び説明することで、自分のペースで面接を進められた!

何となく考えていた自分の将来が明確化できた!資格取得後の今、自分の地元に帰り、地域に役立てる就職先を考えている。

発表の練習を繰り返すことで、人と話すことに自信が持てた。

地域と社会に選ばれる、「実践力」「応用力」「人間力」を養います。

- ☑ 専門性がより高まる
- ☑ 直接就職に結びつく可能性がある
- ☑ 職業の適性がわかる
- ☑ 就活時のアピールポイントになる
- ☑ コミュニケーション能力・思考力が高まる
- ☑ 幅広い価値観が学べる
- ☑ 学部学科を超えた仲間ができる

メリットいっぱい！
いつからでも気軽にチャレンジできるのがイイね！

気になったら事務局へ来てね！

中部大学 研究推進事務部COC推進課 16号館3F
Phone.0568-51-1763　e-mail:coc@office.chubu.ac.jp　www3.chubu.ac.jp/coc

中部大学地域創成メディエーター資格申請　ルーブリック（Ａ－２）　**【「動く」の活動責任者（推薦者）が記入して下さい。申請書<Ａ－１表>に添付の上、提出下さい。】**

＜Ａ－２表＞

【ルーブリックは、学生に見せて、この項目で評価されることを伝えて頂きますようお願いします。】

被推薦者氏名		学籍番号	
認定活動名称		推薦者（教職員）	所属：　　氏名：　　㊞

到達目標	区分	小区分	通し番号	大項目	対応測定目標	配点	3点 / 6点	A（3点） / A（5点）	B（4点）	B（2点） / C（3点）	D（2点）	E（1点） / C（1点）	F（0点） / E（0点）	点数
1）地域で生じている問題について理解し、解決のための地域の取り組みに自主的かつ継続的に仲間と協力し参加することができる。またその活動に意義を見出すことができる。 2）取り組みに係る様々な主体とコミュニケーションを円滑にとることができ、自らの担当内容について責任をもって成し遂げることができる。そのためのPDCAサイクル、報告・連絡・相談を滞りなく実施することができる。 3）地域の取り組みに係ることで、自己理解を深め、自己啓発を進め、キャリア設計を再構築することができる。 4）自分の専門性と特性を活かし、新しい視点からの意見や提案をすることができる。	「学ぶ」		1	合計10単位の整合性がとれている		3		十分整合性がとれている		整合性がとれている		整合性が不十分	整合性がない	
			2	自由選択の"地域関連科目"が活動(「動く」)と関連している		3		十分関連している		関連している		関連が不十分	関連が無い	
			3	自由選択の"地域関連科目"の本来の意義や目的が理解できる		3		十分理解している		理解している		理解が不十分	理解が無い	
			4	自分にとっての「関連科目」の意義が整理できる		3		十分整理されている		整理されている		整理が不十分	整理されていない	
			5	他者との関りを学び、実践できる		3		十分実践できる		実践できる		実践していない	実践できない	
			6	「自分と社会の関係」について、自分の考えを持ち、それを人に説明できる		3		十分説明できる		説明できる		これから（今後）説明する	説明できない	
			7	組織を活性化させる力が身についている		3		十分身についている		身についている		不十分である	身についていない	
			8	"持続可能な社会"のために必要なもの・こと・ひとを考える力が身についている		3		十分身についている		身についている		不十分である	身についていない	
			9	考え方や価値観を異にする人々との対話に要するコミュニケーション能力が身についている		3		十分身についている		身についている		不十分である	身についていない	
			10	合意形成のために重要な行動が理解できる		3		十分理解している		理解している		理解が不十分	理解が無い	
	「動く」	活動状況	1	参加したプロジェクトの目的や概要が理解できる	1）	3		指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		若干の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度は他者に明確に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、必要な内容を他者に明確に伝えることができない	
			2	十分な質の活動ができる	1）	3		行動に関して、遅延や間違いがほとんどなく、確実に実施することができる		行動に関して、たまに遅延や間違いがあるが、自らそれに気づき修正し、質の向上のために努力を重ねることができる		行動に関して、頻繁に遅延や間違いがある。修正の指導をしても、十分な修正ができないことが多い	期待される行動に関して、頻繁に遅延や間違いがある。指導をしても修正の努力ができない	
			3	十分な量の活動ができる	1）	3		申請者に期待される活動量を十分に満たして参加することができる		申請者に期待される活動量の6割程度は参加することができる		申請者に期待される活動量の3割程度しか参加することができない	申請者に期待される活動量の3割未満しか参加することができない	
			4	責任感をもって活動に参加できる		3		自分の仕事はもちろん、チーム全体のどんな仕事でも嫌がらずに丁寧に行うことができ、約束を守り迷惑をかけることはない		自分の仕事は期日を守って完成させ、遅刻や無断欠席も殆どしない		自分の仕事であっても期日を守らず、遅刻や無断欠席も多く、関係者に迷惑をかけることが多いが、指導があれば反省し、改善することができる	自分の仕事であっても期日を守らず、遅刻や無断欠席も多く、関係者に迷惑をかけることが多い。指導があっても、改善することができない	
			5	主体的に活動に参加できる	1）	5		指導がなくとも、極めて積極的に参加することができる	指導がなくとも、積極的に活動に参加することができる	たまに自主性を欠くこともあるが、概ね自主的に活動に参加することができる	指導がないと活動が停滞することもあるが、指導すれば活動に前向きに参加することができる	常に指導がないと活動に参加しないが、指導すれば活動に前向きに参加することができる	指導しても前向きに参加することができない	
			6	解決すべき課題が理解できる	1）	5		指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の5割程度は明確に他者に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の3割程度は他者に明確に伝えることができる	指導があれば、必要な内容の1割程度は伝えることができる	詳細な指導があっても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			7	課題解決のためにクリティカルシンキングを実行できる		3		指導がなくとも、適切な情報の収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる		指導があれば、適切な情報の収集およびそれに基づく客観的な判断を十分に実行することができる		指導があれば、情報の収集ができ、それに基づく判断もできるが、情報の適切さや判断の客観性には不足がある	詳細な指導を重ねても、情報の収集や判断ができない	
			8	プロジェクトにおける自分の役割が説明できる	2）	3		指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		指導をすれば、必要な内容の5割程度は明確に他者に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			9	チーム活動における自分の特性を理解し、チームに貢献できる	3） 4）	3		自力で自分の特性をほぼ把握しており、他者にも概ね伝えることができ、活動にもそれを活かす努力をしている		指導があれば、自分の特性を把握することができ、他者にも概ね伝えることができ、活動にもそれを活かす努力をすることができる		詳細な指導を重ねれば、自分の特性を把握することが概ねできるが、他者にわかりやすく伝えることができない。活動にその特性を活かす努力が不足している	詳細な指導を重ねても、自己の特性を把握・整理できない	
			10	自分の専門性を活かし、新しい視点からの意見や提案をすることができる	4）	3		自ら、自分の専門分野に関する情報収集を行ったり、新しい意見や提案を述べることができる		指導があれば、自分の専門分野に関する情報収集を十分に行ったり、新しい意見や提案を述べることができる		指導があれば、自分の専門分野に関する情報収集を行うことができるが、質や量が不十分である。また、意見や提案には新しい視点はほとんどない	指導があっても、自分の専門分野に関する情報収集を行うことができず、意見や提案もほとんど行うことができない	
			11	PDCAサイクルを理解し、実行できる	2）	3		自ら、PDCAサイクルを理解し、サイクルを回しながら活動をよりよく進めることができる		指導があれば、PDCAサイクルを理解し、サイクルを回す努力をして活動を進めることができる		指導があればPDCAサイクルは理解できるが、サイクルを意識した活動ができない	指導があっても、PDCAサイクルが理解ができず、サイクルを意識した活動もできない	
			12	報告・連絡・相談（ホウ・レン・ソウ）を理解し、実行できる	2）	3		指導がなくともホウ・レン・ソウを理解でき、適切な報告・連絡・相談がおよそできる		指導があればホウ・レン・ソウを理解でき、適切な報告・連絡・相談がおよそできる		指導があればホウ・レン・ソウを理解でき、報告・連絡・相談のいずれかはできる	何度指導があってもホウ・レン・ソウの理解が薄く、報告・連絡・相談のいずれもできない	

推薦理由	小計点　[70点満点]	配分考慮後の合計点（小計×0.5）[35点満点]

別紙② ルーブリック評価〈B表〉

中部大学地域創成メディエーター資格申請 ルーブリック(B) 【発表指導責任者が申請後から発表会4日前までに記入し提出ください。】

＜B表＞

【ルーブリックは、学生に見せて、この項目で評価されることを伝えて頂きますようお願いします。】

被指導者氏名		学籍番号	
認定活動名称			

発表指導責任者	所属：	氏名： ㊞

到達目標	区分	小区分	通し番号	大項目	対応到達目標	配点 3点 5点	A(3点)		B(2点)		C(1点)	D(0点)	点数
							A(5点)	B(4点)	C(3点)	D(2点)	E(1点)	F(0点)	
1)地域で生じている問題について理解し、解決のための地域の取り組みに自主的かつ継続的に仲間と協力し参加することができる。またその活動に意義を見出すことができる。 2)取り組みに係る様々な主体とコミュニケーションを円滑にとることができ、自らの担当内容について責任をもって成し遂げることができる。そのためのPDCAサイクル、報告・連絡・相談を滞りなく実施することができる。 3)地域の取り組みに係ることで、自己理解を深め、自己啓発を進め、キャリア設計を再構築することができる。 4)自分の専門性と特性を活かし、新しい視点からの意見や提案をすることができる。	「動く」	内容・組織の理解	1	参加したプロジェクトの活動目的が理解できる	1)	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		若干の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度は伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			2	参加したプロジェクトの活動概要が理解できる	1)	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		若干の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度は伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			3	参加したプロジェクトの運営組織(フレームワーク)と関係者(対象者)について理解できる	1)	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		若干の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度は伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			4	参加したプロジェクトの成果について理解できる		3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		若干の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度は伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			5	参加したプロジェクトにおける今後の課題が理解できる		3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		若干の指導をすれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		詳細な指導をすれば、必要な内容の5割程度は伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
		活動後の内省・成長	6	プロジェクトに参加したことによる自分の成長が説明できる	1)	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、必要な内容の5割程度は明確に他者に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			7	プロジェクトに参加した自分に対する課題が説明できる	1)	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		指導をすれば、必要な内容の5割程度は明確に他者に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			8	チーム活動における自分の特性を理解し、今後の活動に活かすことができる	3)	5	指導がなくとも、自分の特性を十分に理解しており、チーム活動における自分の利点や今後の必要な改善点を簡潔に説明することができる	指導がなくとも、自分の特性を概ね理解することができ、今後のチーム活動における自分の利点や必要な改善点を概ね説明することができる	若干の指導があれば、自分の特性を十分に理解することができ、今後のチーム活動における自分の利点や必要な改善点を概ね説明することができる	指導を重ねれば、自分の特性を概ね理解することができ、今後のチーム活動における自分の利点や必要な改善点を概ね説明することができる	指導を重ねれば、自分の特性をある程度理解することができ、今後のチーム活動における自分の利点や必要な改善点についても少しは説明することができる	指導を重ねても、自分の特性を理解することができず、今後のチーム活動における自分の利点や必要な改善点についても説明することができない	
			9	成果を生むために重要なチームや個人としての在り方や考え方について説明できる	1)	3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、必要な内容の5割程度は明確に他者に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
			10	「地域創成メディエーター」資格の目的や意義について理解できる		3	指導がなくとも、十分な内容を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、必要な内容の7割程度を他者に明確に伝えることができる		指導があれば、必要な内容の5割程度は明確に他者に伝えることができる	詳細な指導をしても理解ができず、他者に必要な内容を明確に伝えることができない	
	プレゼン準備		1	プレゼンに必要な資料収集ができる		3	十分な量かつ適切な資料を集められる		十分な資料は集められないが、積極的に行っている		指導を重ねれば、資料を集められる	資料を集められない	
			2	プレゼン内容の方向性を考えることができる		3	自ら考えて工夫・改善が見られる		指導があれば、工夫・改善がみられる		詳細な指導を重ねて、ようやく工夫・改善がみられる	詳細な指導を重ねても、自らの工夫・改善がみられない	
			3	プレゼン内容を総合的に理解できる		3	十分に理解できる		ある程度は理解できる		部分的に理解できないところがある	理解できない	
			4	プレゼン内容を通して、大学での自らの成長や課題を客観的に整理できる		3	十分に成長がみられ、課題についても整理できる		課題については整理できる		自らでは気付いていない課題がある	指導を重ねても、整理できない	
			5	プレゼン内容を通して、将来自分が貢献したい「地域」における「活動」を語ることができる		3	具体的な活動内容を語ることができる		ある程度の活動内容を語ることができる		活動内容が曖昧である	具体的な活動内容がない	
												合計点 [47点満点]	

別紙②　ルーブリック評価〈C表〉　　＜C表＞

中部大学地域創成メディエーター資格申請　ルーブリック(C)【発表会当日に評価員が記入】

被評価者氏名		学籍番号	

評価委員	所属:	氏名:	㊞

区分	大項目	チェック	得点	小項目
プレゼン当日	プレゼン内容が分かりやすい		A(3点)	内容が簡潔にまとめられていて理解しやすい
			B(2点)	内容は簡潔にまとめられているが、理解しづらい部分がある
			C(1点)	内容が簡潔にまとめられていないか、量が少なすぎるため、理解できない
			D(0点)	明らかに発表内容として不十分である
	プレゼン資料が見やすい		A(3点)	十分に工夫されていて分かりやすく、また効果的である
			B(2点)	工夫が少なく簡素ではあるが、理解できる
			C(1点)	資料不足あるいはまとめきれておらず、理解しづらい部分がある
			D(0点)	明らかに資料作成が不足していて、理解できない
	声の大きさが適切で、身振りも使ってプレゼンができる		A(3点)	聞き取りやすい声で、身振りも使って発表ができる
			B(2点)	聞き取りやすい声ではあるが、身振りが少なく淡々と発表している
			C(1点)	声は大きいが、早口で聞き取りづらい
			D(0点)	声が小さく、身振りも少なく、発表内容が分かりづらい
	プレゼンにふさわしい服装や姿勢、視線、言葉遣いができる		A(3点)	いづれもふさわしいものである
			B(2点)	姿勢が悪く、下を向いているなど視線が定まっていない
			C(1点)	言葉遣いが悪く、言い直しが多い
			D(0点)	いづれもプレゼンにふさわしいものではない
	プレゼン内容に対しての質疑応答ができる		A(3点)	質問に対して適切に答えることができる
			B(2点)	質問に対して時間は必要だが、答えることができる
			C(1点)	質問に対して適切に答えられない
			D(0点)	質問に対して全く答えられない
	プレゼン内容を通して、今後の自分のキャリア設計を伝えることができる		A(3点)	具体的な内容を伝えることができる
			B(2点)	曖昧な部分もあるが、ある程度は伝えることができる
			C(1点)	キャリア設計と思われる内容はあるが、伝えられない
			D(0点)	キャリア設計と思われる内容がない
				合計点　[18点満点]

別紙③　地域創成メディエーター学生発表会 チラシ

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

文部科学省 地(知)の拠点

春日井のまちがボクらのキャンパス。

Just move on!
What you are now makes what you will be in the future.

地域創成メディエーター資格とは?
地域の人と人とを結びつけるメディエーター「mediator:媒介者」となり、春日井市の様々な問題に主体性をもって取り組み、中部大学の建学の精神「不言実行・あてになる人間」を身につけた学生に認定される資格です。

中部大学
第5回「地域創成メディエーター」学生発表会

参加無料

PLUS エクスプレッション

日時　2019 2/19 (TUE) 13:30▶16:30
13:00受付開始

会場　中部大学 不言実行館 1F アクティブホールほか

主催／中部大学　後援／春日井市

地域創成メディエーターを育成する
「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」は、
平成25年、文部科学省が地域の課題解決に取り組む大学を支援する
「地(知)の拠点整備事業」＝大学COC(Center of Community)事業に採択されました。
全国の大学等から319件が申請し、採択は52件、
そのなかで私立大学は15校のみという、優れた評価を得た事業です。

「地域創成メディエーター資格」認定の最終課題「プラスエクスプレッション」は
講義での規定単位取得に加え、
キャンパスを地域に広げた課外体験に参加・実践した学生たちが、
まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して
現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果の発表の場。
実社会のなかで起こった自身の変化や、自己成長を通じて得た、
いまの「自分」をプレゼンテーションします。
彼らの経験や努力の軌跡を知り、「自分」を生き生きと語るファイナルステージが
見る人を触発し、感動させてくれるでしょう。

お問い合せ
中部大学 研究推進事務部COC推進課
TEL.0568-51-1763　FAX.0568-51-4659
e-mail／coc@office.chubu.ac.jp
HP／http://www3.chubu.ac.jp/coc/
中部大学 COC　検索
中部大学　〒487-8501
愛知県春日井市松本町1200番地

「地域創成メディエーター」資格は、資格そのものが大切なのではなく、
その道のりこそが学生自らにとって大事なことであり、「意義」と「価値」がある「行動」です。

文部科学省 平成25年度「地（知）の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

第5回「地域創成メディエーター」学生発表会 PLUS エクスプレッション

プログラム

13：30　開会挨拶：松尾 直規（中部大学 研究戦略部門COC推進室長）
13：35　学生によるプレゼン発表［70分］
14：50　学生によるポスター発表［80分］2Fステージエリア
16：20　地域創成メディエーター認定証 授与式
16：25　閉会挨拶：櫻井 誠（中部大学 研究戦略部門COC推進室 副室長）
16：30　閉会

＊プログラム内容は予告なく変更される場合がありますのでご了承ください

プレゼン発表
地域創成メディエーター資格に挑む学生が、これまでの知識修得と体験を振り返り、達成感や今後の課題、目標なども交え、自己成長について自らプレゼンテーションを行います。

ポスター発表
自己プレゼンテーション同様、ポスターを用いて自己成長について視覚的にPR。参加者の皆さまには学生と直接コミュニケーションをとっていただき、ご意見やアドバイスをお願いします。

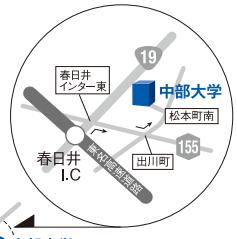
会場 | 中部大学キャンパス 不言実行館 1F アクティブホール

中部大学へのアクセス

●JR神領駅からスクールバス
JR中央本線「神領（じんりょう）」駅下車
（名古屋駅より「普通」で約26分）、
北口「中部大学スクールバスのりば」から約7分

●JR高蔵寺駅から名鉄バス
JR中央本線・愛知環状鉄道「高蔵寺（こうぞうじ）」駅下車
（名古屋駅より「快速」で約26分）、
北口8番のりばより名鉄バス
「中部大学前」行に乗車（約10分）

●お車ご利用の場合
東名高速道路
春日井インターチェンジより約5分



お申し込み締切 2/14（THU）

参加ご希望の方は、下記ご記入のうえFAXにてご送信ください。お申し込みはメール、お電話でも受けつけております。

ふりがな			
氏　名			
勤務先 団体名			
所　属		役　職	
連絡先	TEL		
	e-mail		

中部大学 ［参加お申し込み・お問い合せ先］ 中部大学 研究推進事務部COC推進課
FAX. 0568-51-4659／TEL. 0568-51-1763　e-mail. coc@office.chubu.ac.jp

文部科学省 地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)（平成25年度採択）
『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業』

第5回地域創成メディエーター学生発表会 PLUS エクスプレッション

日時 ： 2019年2月19日(火曜日)　午後1時30分～午後4時30分
会場 ： 中部大学　不言実行館　1階　アクティブホール，2階　スチューデント･コモンズ
主催 ： 中部大学
後援 ： 春日井市

13時30分～13時35分 （会場:1F アクティブホール）
開会挨拶　松尾　直規 （中部大学 研究戦略部門COC推進室長）

13時35分～14時20分
地域創成メディエーター紹介　上野　薫 （中部大学 応用生物学部・准教授）

学生による自己プレゼンテーション

1「“もったいない”をなくしたい」 金城星太 （応用生物学部　環境生物科学科　3年）
2「強く生きる！」 野村優太 （生命健康科学部　スポーツ保健医療学科　3年）
3「人生を喜劇にするために」 岩倉周平 （応用生物学部　環境生物科学科　3年）
4「やがて“食”につながるもの」 大須賀隆起 （経営情報学部　経営会計学科　4年）

＜移動＞

14時35分～16時00分 （会場:2F スチューデント･コモンズ）
学生によるポスター発表　※詳細は裏面をご覧ください。
14:35～15:00　Aグループ　31名
15:05～15:30　Bグループ　31名
15:35～16:00　Cグループ　29名

＜休憩 ・ 移動＞

16時20分～16時25分 （会場:1F アクティブホール）
地域創成メディエーター認定証　授与式　石原　修 （中部大学長）

16時25分～16時30分
閉会挨拶　櫻井　誠 （中部大学 研究戦略部門COC推進室 副室長）

** 中部大学　研究推進事務部COC推進課　**
〒487-8501　愛知県春日井市松本町1200番地
Tel:0568－51－1763

■学生によるポスター発表（2月19日）

NO.	学科	氏名	学年
A-1	都市建設工学科	種瀬　香凜	１年
A-2	建築学科	井上　健太	３年
A-3	コミュニケーション学科	安永知加子	３年
A-4	建築学科	渋谷　幸甫	３年
A-5	都市建設工学科	高田　謙太	２年
A-6	食品栄養科学科　管理栄養	畑尾　一成	３年
A-7	食品栄養科学科　管理栄養	松田　佑衣	２年
A-8	歴史地理学科	松井　　慎	３年
A-9	食品栄養科学科　管理栄養	葛西　瑶紀	２年
A-10	歴史地理学科	塩屋　木雲	３年
A-11	経営総合学科	寺澤　佑哉	３年
A-12	都市建設工学科	村山　美月	３年
A-13	食品栄養科学科　管理栄養	田島　遥	１年
A-14	コミュニケーション学科	平井　直生	２年
A-15	食品栄養科学科　管理栄養	兼子　莉瑳	１年
A-16	食品栄養科学科　管理栄養	山口恵里佳	２年
A-17	生命医科学科	八木　望未	４年
A-18	経営総合学科	樋口　雄大	３年
A-19	スポーツ保健医療学科	鈴木　達生	３年
A-20	食品栄養科学科　管理栄養	丹羽　由稀奈	１年
A-21	経営総合学科	倉知　大就	３年
A-22	食品栄養科学科　管理栄養	牛田　舞香	２年
A-23	環境生物科学科	寶壁　　圭	３年
A-24	食品栄養科学科　管理栄養	笠原　涼佑	１年
A-25	生命医科学科	久野　広喜	３年
A-26	スポーツ保健医療学科	水野　裕達	２年
A-27	食品栄養科学科　管理栄養	徳丸　真由	１年
A-28	欠番		
A-29	スポーツ保健医療学科	友成　真央	３年
A-30	スポーツ保健医療学科	岩田　有貴	３年
A-31	スポーツ保健医療学科	小木曽　雄	２年
A-32	国際学科	天野　佑美	３年

31名

NO.	学科	氏名	学年
B-1	スポーツ保健医療学科	岡崎　美紀	２年
B-2	スポーツ保健医療学科	岸本　雄太	３年
B-3	スポーツ保健医療学科	小松　大斗	２年
B-4	環境生物科学科	松永　　壮	３年
B-5	歴史地理学科	楠井　雅也	３年
B-6	食品栄養科学科　管理栄養	大鋸　千花	２年
B-7	歴史地理学科	鈴木隆之輔	３年
B-8	食品栄養科学科　管理栄養	豊田　慎一郎	１年
B-9	食品栄養科学科　管理栄養	田中　文乃	１年
B-10	スポーツ保健医療学科	黒田　絢香	２年
B-11	生命医科学科	舟木奈瑠海	３年
B-12	経営総合学科	小林　将也	３年
B-13	食品栄養科学科　管理栄養	神酒　雅士	３年
B-14	建築学科	伊藤菜奈子	３年
B-15	経営会計学科	石川　彩音	４年
B-16	食品栄養科学科　管理栄養	後藤　立樹	３年
B-17	食品栄養科学科　管理栄養	山本　まどか	１年
B-18	食品栄養科学科　管理栄養	八木　瑞生	２年
B-19	欠番		
B-20	経営総合学科	平岩　正行	３年
B-21	都市建設工学科	山下虎太郎	２年
B-22	食品栄養科学科　管理栄養	片岡　　恵	２年
B-23	歴史地理学科	山本　竜大	３年
B-24	国際学科	濱口　毬彩	３年
B-25	スポーツ保健医療学科	濱岡　　昂	３年
B-26	理学療法学科	篠田　大尚	３年
B-27	食品栄養科学科　管理栄養	秋田　古都奈	１年
B-28	食品栄養科学科　管理栄養	勝亦　彩菜	１年
B-29	経営総合学科	萩原　悠平	３年
B-30	機械工学科	近藤　美帆	４年
B-31	環境生物科学科	柳原　優博	３年
B-32	食品栄養科学科　管理栄養	大崎　美裕	１年

31名

NO.	学科	氏名	学年
C-1	食品栄養科学科　管理栄養	山田　陽菜	２年
C-2	食品栄養科学科　管理栄養	鈴木　愛佳	１年
C-3	食品栄養科学科　管理栄養	谷口　悠華	１年
C-4	経営総合学科	宮本　裕哉	３年
C-5	スポーツ保健医療学科	伊藤　　悠	２年
C-6	経営総合学科	服部　夢大	３年
C-7	スポーツ保健医療学科	近藤　　大	３年
C-8	幼児教育学科	田中　理英	２年
C-9	欠番		
C-10	歴史地理学科	和田　航貴	３年
C-11	経営総合学科	柴田　瑠莉	３年
C-12	都市建設工学科	伊藤　　稜	３年
C-13	食品栄養科学科　管理栄養	垣内　美咲	２年
C-14	歴史地理学科	原田　一輝	３年
C-15	欠番		
C-16	スポーツ保健医療学科	桑原　雅斗	２年
C-17	環境生物科学科	横前　滉太	３年
C-18	食品栄養科学科　管理栄養	池上　琴音	１年
C-19	食品栄養科学科　管理栄養	中澤　美穂	１年
C-20	食品栄養科学科　管理栄養	小野寺　洸大	１年
C-21	環境生物科学科	山田　幹登	３年
C-22	歴史地理学科	小出　拓実	３年
C-23	経営学科	青木　泰樹	４年
C-24	食品栄養科学科　管理栄養	矢口　美花	２年
C-25	作業療法学科	水谷　奈菜	３年
C-26	スポーツ保健医療学科	谷口　啓太	３年
C-27	スポーツ保健医療学科	原島　藍希	２年
C-28	都市建設工学科	小山　竣司	３年
C-29	食品栄養科学科　管理栄養	佐野　雅樹	３年
C-30	食品栄養科学科　食品栄養	濱島　　樹	４年
C-31	食品栄養科学科　管理栄養	高阪　理名	１年

29名

■学生によるポスター発表（3月5日）

NO.	学科	氏名	学年
D-1	スポーツ保健医療学科	有賀　哉人	３年
D-2	生命医科学科	片山　知恵	４年
D-3	作業療法学科	小栗　有加	４年
D-4	都市建設工学科	田中　悠斗	２年
D-5	生命医科学科	下平　優衣	４年

NO.	学科	氏名	学年
D-6	作業療法学科	角　　綾香	４年
D-7	スポーツ保健医療学科	浦野　直太	３年
D-8	生命医科学科	中嶋穂乃佳	４年
D-9	作業療法学科	林　里奈	４年
D-10	都市建設工学科	溝田淳之介	２年

NO.	学科	氏名	学年
D-11	作業療法学科	柳瀬　百花	３年
D-12	経営総合学科	辻合　康志	３年
D-13	食品栄養科学科　管理栄養	加藤　史帆	１年
D-14	食品栄養科学科　管理栄養	鈴木　遥香	１年
D-15	食品栄養科学科　管理栄養	村瀬　リエ	３年

地域創成メディエーターポスター発表者　計106名

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)（平成25年度採択）
『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業』

第5回地域創成メディエーター学生発表会 PLUS エクスプレッション

日時 ： 2019年3月5日(火曜日)　午後1時30分～午後2時00分
会場 ： 中部大学　不言実行館　2階　スチューデント・コモンズ

13時30分～13時35分

開会挨拶　松尾　直規（中部大学 研究戦略部門COC推進室長）

13時35分～13時55分（20分間）

学生によるポスター発表　Dグループ（1人　6～8分）
＊地域創成メディエーター候補学生　15名

13時55分～14時00分

閉会挨拶　櫻井　誠（中部大学 研究戦略部門COC推進室　副室長）

■学生によるポスター発表

NO	学科	年	氏名
D-1	スポーツ保健医療学科	3	有賀　哉人
D-2	生命医科学科	4	片山　知恵
D-3	作業療法学科	4	小栗　有加
D-4	都市建設工学科	2	田中　悠斗
D-5	生命医科学科	4	下平　優衣
D-6	作業療法学科	4	角　綾香
D-7	スポーツ保健医療学科	3	浦野　直太
D-8	生命医科学科	4	中嶋穂乃佳

NO	学科	年	氏名
D-9	作業療法学科	4	林　里奈
D-10	都市建設工学科	2	溝田淳之介
D-11	作業療法学科	3	柳瀬　百花
D-12	経営総合学科	3	辻合　康志
D-13	食品栄養科学科	1	加藤　史帆
D-14	食品栄養科学科	1	鈴木　遥香
D-15	食品栄養科学科	3	村瀬　リエ

＊＊ 中部大学　研究推進事務部COC推進課　＊＊
〒487-8501　愛知県春日井市松本町1200番地　　Tel:0568－51－1763

[第 5 回地域創成メディエーター学生発表会] の様子　　～平成 31 年 2 月 19 日(火)～

開会挨拶　松尾直規
（中部大学教授　研究戦略部門 COC 推進室長）

学生によるプレゼンテーション　1

学生によるプレゼンテーション　2

聴衆からの質疑応答

学生によるポスター発表

評価員による評価

資格認定授与式　石原修（中部大学長）

口頭発表・ポスター発表学生合同記念撮影

別紙④

第５回　中部大学　地域創成メディエーター学生発表会 PLUS エクスプレッション アンケート集計結果

開 催 日：２０１９年２月１９日（火）　１３：３０～１６：３０
場　　所：中部大学　不言実行館　１Ｆ アクティブホール，２Ｆ スチューデント・コモンズ
参加者数：一般３２名　教職員５２名　学生１２名
　　地域創成メディエーター候補学生９４名　　計１９０名
回 収 数：３４名

１．性別　1. 男性（２７名）　2. 女性（７名）

２．年齢　1. 29 歳以下（３名）　2. 30 代（０名）　3. 40 代（４名）　4. 50 代（６名）
5. 60 代（９名）　6. 70 歳以上（１２名）

３．所属

1. 一般市民（８名）　2. 教育関係機関（０名）　3. 地方自治体（０名）　4. 企業（２名）
5. ＮＰＯ・市民団体（1 名）　6. 大学教員（１２名）　7. 大学職員（２名）
8. 学生（１名）　9. ＣＡＡＣ受講生（1 名）　10. オープンカレッジ聴講生（３名）
11. その他（４名）

４．この「地域創成メディエーター学生発表会」を何でお知りになりましたか

1. ホームページ（１名）　2. チラシ（４名）　3. 広報春日井（２名）
4. タウン誌（０名）　5. 所属関係者からの案内（２２名）　6. その他（５名）

５．この「地域創成メディエーター学生発表会」全体のご感想をお聞かせください

1. とてもよかった（１８名）　2. よかった（１４名）　3. 普通（１名）
4. やや不満（０名）　5. 不満（０名）　無回答（１名）

６．この「学生発表会」の会場や運営はいかがでしたか

会場　1. 良い（２３名）　2. やや良い（５名）　3. 普通（４名）
4. やや悪い（０名）　5. 悪い（０名）　無回答（２名）

運営　1. 良い（２３名）　2. やや良い（６名）　3. 普通（１名）
4. やや悪い（０名）　5. 悪い（０名）　無回答（４名）

７．学生の自己プレゼンテーションを踏まえ本学教育実践に対するご意見ご感想がございましたらお聞かせください

・とてもよい取り組みだと思いますので続けてほしいと思います。
・ 学生が教員以外の人も交えたプレゼンテーションを行うことは、社会に出た際の実践教育ともなり、よい取り組みです。
・地域と密着した活動を今後も続けて、その活動を広げるようにお願いします。
・皆さん堂々と発表されていて共感できました。
・多くの人の中で何も見ずに話すことが出来るのは素晴らしい。
・若者は変わることができるんだなあと感心しました。

・4 人とも、上手にプレゼンをしておりました。この経験を是非活かしてください。
・就職活動では売り手市場であるが、そんな環境にあってもメディエーターを目指して活動されたことは本当に素晴らしいと思う。きっと将来に生かされることと期待しています。
・現役時代、管理のサークルを生かした事例発表をやらされたことや、部下を指導したことを思い出すほど、今日のプレゼンテーションはよく出来ていました。社会人になっても頑張ってください。
・岩倉君のように全国を移って勉強したのは大切ですね。
・地域にあてにされる人材を創るという貴校の教育方針は素晴らしいと思っています。学生のときから地域の人とものと文化に触れて、その体験の中から学生達が何かをみつけてくれることが私の願いでもあります。どんどん地域に学生を放り込んでください。
・若者が一生懸命取組む姿に感動しました。皆さんがんばってください。
・とても楽しかったし良かったです。中部大学素晴らしいですね。

（大学教員）
・参加した学生にとってよい経験になっていると思いました。
・大学における学生の自己改革・成長の重要性を改めて知ることが出来ました。
・発表者の地元がわかると、春日井市周辺での活動が各自の地元でどう活きてくるのかがわかりやすくなると思います。
・チャレンジサイトや春日井市教育研究支援プログラムに積極的に参加できる仕組みを作ってください。

８．その他ご意見ご要望などございましたらお聞かせください

・また次が楽しみです。ありがとうございました。
・貴校の研修センターがある恵那での地域と連携した活動を期待しています。（春日井市だけでなく）
・ポスター発表が原稿を読んでいるだけの子がいたが、その後の質問にはきちんと答えられていたので少し残念に感じた。社会の中では、人に伝える機会が増え、重要になってくるかと思いますので、指導してあげていただきたいと思います。
・残念ながら雨の中で出席したくなかったのですが、出席してよかったと思いました。
・石尾台地区の町内会活動に参加していますが、老齢化で活気がなくなっています。是非若者の多くの参加を期待してこの会に来ました。何か一つでも協力していただければと思っています。
学生課には少しお話させていただきました。
・画面がもう少し観やすくなるよう施設を改善されるといいと思います。

（大学教員）
・一般学生、特に次につながる 1～2 年生の見学参加につながると良いのではと思いました。
・ステージの発表者にスポットライトをあててほしかった。表情を見たいので。
・会場がやや寒く、ステージ画面も暗くて見にくかったので、環境に気を使ってほしかった。
・ポスター発表の会場にお菓子や飲み物があったらもっと良かった。

2019 年 2 月 19 日実施

別紙⑤　謝辞（LE 藤野慎也）

謝辞

日増しに冬の寒さも和らぎ、春めいた暖かな日々の到来が感じられる頃になりました。本日は諸先生方並びにご来賓の方々のご臨席を賜り、このような盛大な式典を挙行して頂き、感謝申し上げます。先ほど学長石原修先生からご祝辞を頂き、大学生活を終える事を実感しました。

卒業を目前にして、中部大学の一員として迎えられた入学式のことを思い出しました。それまでの慣れ親しんだ仲間たちと別れ、大きな期待と若干の不安を抱きながら、新しい環境へと飛び込みました。中でも私は、救急救命士を目指して努力を重ねてきました。臨床実習では、目の前で消え行く命にも遭遇し、命を救う事への責任の重さと命の尊さを学ぶことができました。この貴重な経験により救急救命士への思いは一層強くなりました。部活動では陸上競技部に所属し、五千メートル競技を専門に取り組みました。仲間と共に競技に打ち込み高め合ったことで培われた健全な心体と、競技を深く追求することにより論理的思考を習得することができました。この四年間は“学び”と“スポーツ”が複雑に絡み合うことでアスリートとしての成長だけでなく、人としても成長できた有意義でかけがえのない時間となりました。さらに、COC事業では障がい者スポーツ交流に参加し、スポーツやレクリエーションを通じて地域の方々と連携教育を図り、地域再生、活性化に取り組みました。この体験が一つのきっかけとなり、私は春日井市消防本部への入職を決意しました。四月からは、春日井市民の安全と安心に貢献して行く所存であります。

これから私たちが踏み出す社会は、ITの進化とグローバリゼーションの進展がかつてないスピードで大きな変化を遂げており、私たちには変化への柔軟な適応力が求められています。一方で世界に目を向けると、米国（アメリカ）によるNAFTAの見直しや、TPP交渉、パリ協定からの離脱表明、中国の一帯一路構想など、世界経済が変革の時を迎えています。また、各地で発生しているテロや北朝鮮の核・ミサイル問題など、身近に迫り来る恐怖に不安は尽きません。私たちが歩んで行く道は、決して平坦で穏やかなものとはいえません。こうした苦難の時代の中でも、中部大学で培った考える力と目標に向かって突き進むブレない心で、力強く歩んで行くことをお約束します。

私は親元を離れて過ごしたこの四年間で、自分を支えて下さる多くの方々の存在の大きさと尊さに気付くことができました。専門知識だけでなく社会人として必要な知識、教養にご教授いただきました先生方、大学に通うための支援や、物心両面において支えてくれた両親に心から感謝申し上げます。

本日、無事に卒業の日を迎えた私たちは、自立した社会人となる強い覚悟でありますが、これからの人生において多くの壁にぶつかることがあると思います。その時には変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが学長石原　修先生をはじめ、諸先生方、大学職員、ご来賓の皆様方のご健康とご多幸をお祈りすると共に、我が中部大学のより一層の飛躍を望み、卒業生一同を代表して御礼の言葉とさせて頂きます。

平成三十年　三月二十三日

平成二十九年度　中部大学　卒業生代表

生命健康科学部　スポーツ保健医療学科　藤野慎也

（２）ワーキンググループ等報告

①　正課教育ＷＧ

②　地域連携プログラムＷＧ

③　コミュニティ情報ネットワーク事業ＷＧ

④　生活・住環境を考えるまちづくりＷＧ

⑤　高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ

⑥　ＣＡＡＣ運営委員会

①　正課教育ＷＧ

１．活動組織

委員長　　上野薫
副委員長　伊藤守弘
委　員　　竹内環、山羽基、伊藤佳世、羽後静子、小川宣子、牧野典子
（松尾直規）

２．活動計画

4 月-7 月　「地域共生実践」春学期３クラス授業
4 月-3 月　地域創成メディエーター育成のルーブリック評価の見直し
4 月-3 月　地域創成メディエーターへの導き（広報活動）
4 月-3 月　関連科目担当者に対する AL/TBL 勉強会の実施
4 月-8 月　「地域共生実践」テキスト修正案の作成・評価基準の検討
8 月-9 月　春学期「地域共生実践」ふりかえり、評価基準の再検討、協力者勧誘
8 月-9 月　地域創成メディエーター申請様式検討
9 月-1 月　「地域共生実践」秋学期５クラス授業
9 月-3 月　秋学期「地域共生実践」ふりかえり、評価基準の再検討、協力者勧誘
10 月　地域創成メディエーター申請開始
11 月　地域創成メディエーター審査（プレゼンテーション候補者の選出）
12 月-1 月　「地域共生実践」受講生への「地域創成メディエーター」説明会開催
12 月-2 月　地域創成メディエーター学生発表会
2 月-3 月　「地域創成メディエーター」認定

３．活動成果

総括：

計画通りの実施となった。担当教員が増えてきた結果、地域共生実践で学生に与えるグループワークの課題に多様性が生まれ、教授法も基本をおさえつつ新たな試行も認められるようになってきた。また、広報の成果もしくは学生の口コミによる影響と推測されるが、メディエーター資格への学生の履修時での目的意識が高まり、他の関連既存科目との関連付けや連携がスムーズになってきた。このことは、この数年での大きな成果の一つと思われる。なお、課題としては、国家資格取得をめざす学科のうち、現状の地域創成メディエーターの申請資格が「学ぶ」の設定によって実質上困難となっている学科が生じているので、「学ぶ」の認定内容について再度検討をする必要がある。さらに、「動く」の活動についての学生への事前の広報を工夫し、広く学生に認知させ、地域創成メディエーター資格の申請者数の維持および質の確保に努める必要がある。

項目別：

4 月-7 月　「地域共生実践」春学期３クラスの授業運営を実施した。
（履修者 77+41+31＝143 名、教員 6 名）

4 月-3 月　地域創成メディエーター育成のルーブリック評価の見直し：委員会等により意見を収集したが大きな問題は認められなかったため、昨年通りで実施した。

4 月-3 月　地域創成メディエーターへの導き（広報活動）：オリエンテーションでのパンフレット配布・説明などを行った。

4 月-3 月　関連科目担当者に対する AL/TBL 勉強会の実施：ＰＢＬぎふゼミおよびＣＯＣ＋サマースクール、第４回ＦＤフォーラム（大学コンソーシアム京都）など、主担当者の参加により実施した。

4 月-8 月　「地域共生実践」テキスト修正案の作成・評価基準の検討：委員会等により意見を収集したが、大きな問題は認められなかったので昨年通りで運営した。

8 月-9 月　春学期終了後、担当者間で春学期「地域共生実践」のふりかえり、評価基準の再検討を行うとともに、秋学期の協力者の勧誘を行った。

8 月-9 月　地域創成メディエーター申請様式検討：委員会等により意見を収集したが、大きな問題が認められなかったので、昨年同様での実施となった。

9 月-1 月　「地域共生実践」秋学期５クラスの授業運営を実施した。
（履修者 75+80+79+76+77＝387 名、教員 9 名）

1 月-3 月　秋学期終了後、秋学期「地域共生実践」のふりかえり、評価基準の再検討を行うとともに、次年度の協力者を勧誘した。

10 月　地域創成メディエーター申請を予定通り開始した。

11 月　地域創成メディエーター審査（プレゼンテーション候補者の選出）を予定通り実施した。

12 月　「地域共生実践」受講生への「地域創成メディエーター」説明会を開催(2 回実施)した。「動く」指導担当教職員へのポスター作製における指導をより具体的に実施し、配布資料にも明記した。

2 月　口頭発表練習を実施し、プレゼンテーションの本質的な目的や具体的な方法について指導するとともに、学生同士での学びの機会を与えた。
(2019 年 1 月 22 日、2 月 18 日の 2 回実施)

2 月　地域創成メディエーター学生発表会を実施した。
(＋エクスプレッション、2019 年 2 月 19 日および 3 月 5 日の 2 回実施)

2 月-3 月「地域創成メディエーター」認定予定（2 月 5 日時点で 110 名エントリー)。昨年並みの輩出を予定している。

②　地域連携プログラムＷＧ

１．活動組織

委員長　　伊藤守弘
副委員長　櫻井誠
委　員　　花井忠征、羽後静子、武田明、横手直美、丹羽ゆかり、大竹雄平、
　　田中順、（松尾直規）

２．活動計画

＜報酬型インターンシップ＞
4 月上旬　　新入生にパンフレット配布
4 月上旬　　長期型･多業種型（春学期）説明会開催
5 月/10月　　参加学生との意見交換会開催
6 月下旬　　長期休業中特別コース（夏季）説明会開催
9 月下旬　　長期型･多業種型（秋学期）説明会開催
10月上旬　　春日井商工会議所との打ち合わせ会開催
10月中旬　　2018 年度 第 1 回中部大学学外特命教授の会開催
12月下旬　　長期休業中特別コース（春季）説明会開催
2 月下旬　　春日井商工会議所との打ち合わせ会開催
3 月上旬　　2018 年度 第 2 回中部大学学外特命教授の会開催
3 月中旬　　修了証書授与式
＜地域連携住居＞
4 月下旬　　高蔵寺ニュータウンウォーク運営補助
5 月/10月　　春日井市主催　クリーン作戦参加
7 月上旬　　高蔵寺ニュータウン世代間交流イベント
　　（中部大学ボランティア・ＮＰＯセンターと共同）
7 月-9 月　　地域貢献活動、自治会行事参加、ＣＵ$^{+}$自主企画実施
11月-12月　　地域貢献活動、自治会行事参加、ＣＵ$^{+}$自主企画実施
1 月-2 月　　地域貢献活動、自治会行事参加、ＣＵ$^{+}$自主企画実施
3 月中旬　　報告会、地域貢献活動、自治会行事参加、ＣＵ$^{+}$自主企画実施

３．活動成果

総括：

本年度より、地域連携プログラムＷＧは、報酬型インターンシップＷＧと高蔵寺ＮＴキャンパスタウン化ＷＧを統合する形で組織されている。

報酬型インターンシップでは、春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に社会の現場で学生を教育するインターンシップ型の就労システムの構築を目的とした。また、地域連携住居では、高齢化で

衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で、地域と大学が融合した若者も生活する場とする。特に入居学生による活動組織である、中部大学ＫＮＴ創生サポーターズＣＵ⁺（通称ＣＵ⁺）が地域貢献活動を行っている。ＣＵ⁺主催によるコーヒーサロンなどの地域貢献活動が地域住民において好評である。

2018 年度　項目別成果：

＜報酬型インターンシップ＞

１）学外特命教授の会を 2 回(10 月、3 月)行った。

２）春日井商工会議所と 2 回(9 月、2 月)打ち合わせを行った。

３）春学期、夏季休業中、秋学期、春季休業中、医療系報酬型インターンシップ合計 115 名参加した。内訳は春学期 12 名、夏季休業中 45 名、秋学期 11 名、春季休業中 17 名、医療系 30 名(LP 14 名、LC 16 名)である。

４）ポイント制度により報酬型インターンシップ修了証書を授与することを決定し、本年度は 8 名に授与する予定である。

５）学内説明会を 4 回（参加学生数 4 月：115 名、6 月：105 名、9 月：29 名、12 月：37 名）開催した。

６）参加学生との意見交換会を 1 回（10 月参加学生数：6 名）開催した。

７）ポスター、パンフレットを作成し、全学生に周知した。

８）登録企業が 78 社（2019 年 1 月 11 日現在）に増加した。

報酬型インターンシップ説明会

学外特命教授の会

修了証書授与式(2017 年度)

＜地域連携住居＞

１）2015 年から地域連携住居の運用を開始し、2018 年度の入居学生は 72 名(2019 年 1 月 11 日現在)

２）新入生宛入学手続関係書類に案内チラシを同封した。

３）学生寮を退寮する学生に 3 回の説明会を実施した。

４）中部大学ＫＮＴ創生サポーターズＣＵ⁺（通称ＣＵ⁺）は 11 回の自主企画を実施し、自治会等が主催した行事と合わせ約 60 回の活動を行った。

高蔵寺ニュータウンウォーク

ＣＵ⁺夜警

世代間交流イベント

③　コミュニティ情報ネットワーク事業ＷＧ

１．活動組織

委員長　　保黒政大
副委員長　富永敬三
委　員　　前田和昭、宮下浩二

２．活動計画

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がＩＴ化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を推進する。

１）医療情報システム

医療情報共有システムを改良すると共に、システム利用業種の増加を図る。

２）ＮＰＯ活動情報受発信システム

・活動情報の発信およびホームページ広報のために地域広報誌を作成、発行する。

・高校生向け部活動支援

体育会系部活動に所属する高校生に向けて、部活動におけるケガの発生を未然に防ぐための講義・実技の講習会を実施する。

＜イベント＞

6 月　　スポーツ障害予防の講義・実技講習会
11 月　　スポーツ障害予防の講義・実技講習会
11 月　　デザイン講習会
12 月　　地域広報誌の作成・発刊(1 回目)

３．活動成果

【イベント】

・部活動支援講習会(6 月) 参加学生数：5 名
高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。
参加生徒数：約 180 名

・まちこみゅニュース編集に向けた、地元のデザイナーによるデザイン講習会(10 月) 。
参加学生数：約 40 名

・部活動支援講習会(11 月) 参加学生数：8 名
高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ外傷の応急処置方法の講義と実技講習会を実施。
参加生徒数：約 130 名

・まちこみゅニュース編集に向けた、地元のデザイナーによるデザイン講習会(1 月)。
参加学生数：1 名

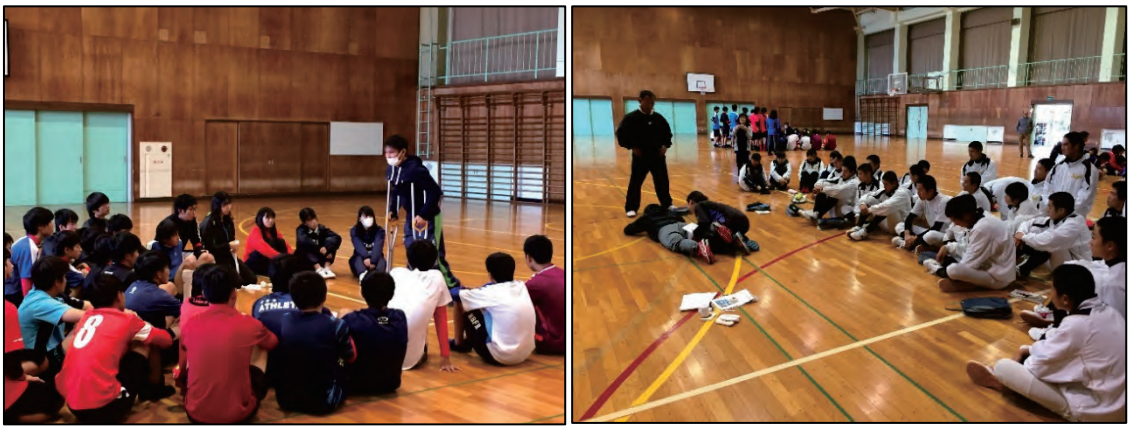
・「まちこみゅニュース Vol.7」を発行(2 月) 参加学生数：1 名

【概要】

・春日井市医師会への医療情報共有システムは今年度で停止となったが、中部大学で運用しているサーバでのサービスは継続中。

・春日井市内の高校にて部活動時のケガ防止やケガ発生時の対応に関する講習会を実施した。（参加学生数：13 名）

・ＮＰＯの活動情報発信と情報共有のためのホームページ周知と電子媒体が苦手な方々への対応として紙媒体の「まちこみゅニュース」を発行。（参加学生数：1 名）



スポーツ障害予防・応急処置の講義・実技講習会

デザイン講習会

④　生活・住環境を考えるまちづくりＷＧ

１．活動組織

委員長　　磯部友彦
副委員長　松山明
委　員　　岡本肇、余川弘至、横江彩、行本正雄、尾鼻崇、林良嗣、小川宣子

２．活動計画

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発研究を進める。

1）意見交換会などの実施
高蔵寺ニュータウンの課題についての住民などとの意見交換の場に参加

2）まちづくり講演会の開催
まちづくり講演会を開催して、全学部の学生に「まちづくり」の意義とそれへの参加方法を学ぶ機会をつくる。

3）タウンウォッチングの実施や地域活動への参加
様々な地域の視察を通して、学生の学習に役立てる。
春日井まつり「わいわい☆カーペンターキッズ」にボランティア参加する。

4）正課並びに自主活動の強化
通年　演習・ゼミナールのテーマとして現実の地域課題を取り上げる。
通年　卒業研究のテーマとして地域課題に対する解決方法に取り組む。
通年　地域の人々との十分なコミュニケーションを交えた学生の自主活動を促進する。
通年　過年度の地域志向研究経費による活動のフォローアップをする
通年　地域創成メディエーターの育成を計画的に実施する。

３．活動成果

1）正課としての活動
・都市建設工学科「部門創成Ｂ(３年生科目)」において現地視察等を実施。
10 月 16 日　名古屋高速道路公社視察【参加学生 16 名】(磯部対応)
10 月 16 日　高蔵寺ニュータウン視察【参加学生 16 名】(岡本対応)
10 月 30 日　春日井市役所とＪＲ春日井駅の視察【参加学生 16 名】(磯部対応)
10 月 30 日　名古屋市大曽根駅周辺から名古屋駅周辺までのまちの視察
【参加学生 16 名】(岡本対応)
・都市建設工学科「特別講義（１年生科目)」において、現場見学を実施。
11 月 22 日　東海環状自動車道（岐阜）

山県第一トンネル工事、北方第一高架橋ＰＣ上部工事）【参加学生 86 名】

2）課外活動の実施

・5 月 22 日、27 日　平成 30 年度 木曽三川連合総合防災演習・広域連携防災訓錬に院生・学生参加【参加学生 33 名】（松尾、余川対応）

・7 月 31 日　東海環状第１高架橋ＰＣ上部工事現場視察【参加学生 42 名】（磯部対応）

東海環状第１高架橋ＰＣ上部工事現場視察

・9 月 19 日、11 月 1 日、11 月 17 日、18 日　豊川稲荷薬師如来堂敷地ポケットパークづくり会議のワークショップと社会実験に院生・学生参加【参加学生 4 名】（岡本対応）

・10 月 17 日、18 日　建設技術フェア 2018in 中部（主催:国土交通省中部地方整備局等）に学生参加【参加学生 8 名】（余川対応）

・10 月 20 日、21 日　春日井まつり「わいわい☆カーペンターキッズ」（愛知県建築士会春日井支部、春日井設計協会の行事）に学生参加【参加学生 10 名】（松山対応）

・11 月 11 日、12 月 1 日　高蔵寺ニュータウン定点観測【参加学生 2 名】（磯部対応）

3）各学科の卒業研究

・都市建設工学科での卒業研究において地域に関する多くの課題が選定され、解決方法の検討がなされた。【参加学生 39 名】

・建築学科での卒業研究、卒業設計において地域に関する多くの課題が選定され、解決方法の検討がなされた。【参加学生 70 名】

4）地域志向教育研究活動フォローアップ

・11 月 28 日、12 月 5 日、1 月 23 日、2 月 3 日　春日井市における廃食油の回収調査（計８か所においてアンケート調査した）【参加学生 12 名】（行本担当）

・12 月 1・2・8・9・22・23 日、1 月 12・13 日　春日井市の産地直売ひろば（ＪＡ尾張中央と連携 in ぐぅーぴぃーひろば）での活動【参加学生 31 名】（小川担当）

5）地域創成メディエーターの育成

４．次年度に向けての課題

1）学外向け（例えば地元市民）のセミナー等を開催する。

・とくに、卒業研究、卒業設計のテーマ選定において、地域志向を考慮する。

2）地域創成メディエーターの育成を計画的に実施する。（受講科目の指導を含めて）

3）グループ内の交流（教員だけでなく学生・院生を含める）を活発化させる。

4）春日井地域での活動経験をもとに、他地域での活動にも積極的に取り組む。
（例えば、中部大学と連携協定の締結を結んでいる自治体）

⑤　高齢者・学生交流・ＬＨＳ　ＷＧ

１．活動組織

委員長　　戸田香

副委員長　堀文子

委　員　　長島万弓、野田明子、三摩真己、末田智樹、尾方寿好、矢澤浩成、
谷利美希、松村亜矢子、大竹雄平、殿垣博之、（櫻井誠）

２．活動計画

大学内における定期的な世代間交流会やセミナー、地域活動への参加を通して地域貢献活動の実践を通した学生教育活動の展開と地域の活性化に取り組む。
大学内企画として４企画、地域企画として３企画を計画。

３．活動成果

１）世代間交流会「防災活動体験会～万が一のために備えよう～」（参加者38名）

中部大学機能別分団・中部大学ボランティア・NPOセンター合同で、防災活動体験会を実施した。
4つのテーマについて実演・討論形式で実施した。
①気道異物除去法
②非常時の三角巾の使い方・処置法
③非常用持ち出し袋
④非常食体験
参加者は各テーマに興味を持って取り組み、防災意識の向上に繋がったと思われる。ただし、シニアの参加者が少なく、世代間交流の観点からは課題を残した。今後は、世代間交流と防災意識向上の両方を達成できる会の創出が求められる。

２）世代間交流会「胡麻発芽物語　～ゴマスプラウトって何だ？～」（参加者34名）

管理栄養科学専攻学生による栄養教育を軸に、地域のシニアを対象とした世代間交流会を実施した。内容は①ゴマスプラウトの機能性に関する創作劇、プレゼンテーション、②ゴマ入りたこ焼きの調理と試食会③食品サンプルを用いた食事指導であった。
スタッフ学生にとっては栄養教育の実践の場としてプレゼンテーションやコミュニケーションを学ぶ機会となり、参加者にとっては食材の働きや自身の食生活に興味を持つきっかけとなり、また学生との交流を楽しんでいただく機会となった。参加者の確保が課題となるが、今後も継続していく意義は大きいと考える。

３）福祉用具体験セミナー　「～移動・移乗・体位保持～」（参加者17名）

介護現場で求められる知識と技術をシニアと共に学習する機会を提供した。
参加者の福祉用具に対する認知を深める機会となり、福祉用具の知識や体験を通じた学びが、今後に活用されることが期待できる。
メディエーターを取得した参加学生のファシリテーター養成も活動の一つに含め、安全を確保した学びの機会として交流会の継続を考えたい。

走行式
リフト体験

４）世代間交流会「体力測定会」（参加者97名）

頸動脈超音波検査、尿検査、睡眠・物忘れ相談、体力測定、栄養調査を実施。

日頃の学びの成果を発揮して、地域住民の健康増進活動に貢献する企画を実施。平成25年から継続している企画でありCAAC在籍者を含めた新規参加者を加えて44名の測定を実施した。基準値を外れた方には医療機関の受診をお勧めし、実際の健康管理に効果を発揮していると思われる。今後も長期的展望で継続予定である。

５）LHV（Learning Home Visit）　松本町祭・訪問臨床検査

松本町祭（参加学生14名）

歴史地理学科の学生が地域の諸大明神社にて毎年行われている松本町祭へ参加した。昨年度に続き2回目の参加で、今年度は御輿を担ぐ重要な係を担当した。町をあげての盛大な秋祭りの神事に間近で接することができ、松本町の歴史民俗について学ぶ貴重な機会を得た。来年度以降も参加し交流を継続する予定である。

睡眠・物忘れ相談　学内で月1回開催　月1回、年12回開催

学内の相談企画以外に、実際に地域に出向いて高齢者のご自宅で行える臨床検査を実施。受診行為に至らない高齢者の健康管理・疾病予防の一助として意義は大きいと考える。

６）地域連携健康教室「KCGサークル」　月2回、年15回開催

地域在住高齢者・学生・理学療法学科教員で構成された健康増進サークルであり在籍数は約50名である。主な目的は①地域在住高齢者の健康増進、②高齢者と学生の世代間交流の活性化、③学外活動を通した準医療人としての意識向上、などが挙げられる。特に学生は、臨床実習へ向けてのコミュニケーション能力の向上や予防理学療法の実践の場として積極的にサークルに参加し、学生からはサークルの経験が臨床実習に役だったとの意見が多くあった。KCGサークルはこれからも継続していく予定であるが、今後は客観的指標により学生への効果を検証してく必要があると考える。

７）まとめ

いずれの企画も地域貢献活動として重要なテーマを取り上げて交流が企画されている。参加学生は、高齢者との交流を通して実践的な学びの機会を得られている。一般の参加者の満足度も高いと評価できるが、シニアの参加者が全般的に少なかったことから、世代間交流の観点からは課題を残すことになった。募集の方法を含めた参加者の確保はCOC活動期からの継続的な課題である。

施設設備の面から学内での企画が主となっているが、積極的に地域における活動の展開を計画する必要が有ると思われる。

以上

⑥　ＣＡＡＣ運営委員会

１．活動組織

中部大学アクティブアゲインカレッジ（ＣＡＡＣ）ＷＧはＣＡＡＣ開校準備と運営のための組織として活動してきたが、今年度からＣＡＡＣの運営と発展を目指す組織としてＷＧを発展的に解消し、ＣＡＡＣ運営委員会として組織を改め活動を行った。

委員長　：松尾直規
副委員長：對馬明
委員　　：羽後静子、櫻井誠、林上、末田智樹、藤丸郁代、甲田道子、伊藤正晃、
　　石井和則、種村育人、出口良太、大竹雄平、渡邉真和

２．活動計画

高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア世代への実践教育。

４月　3・4 期生の後期授業（春学期）を開始する。
５月　5 期生を募集する。
７月　5 期生の合否を決定する。
８月　既卒者（1・2 期生）の体力測定会と社会貢献活動報告会を開催する。
８月　3 期生の修了式を行う。
９月　5 期生の入学式を行い、4・5 期生の授業（秋学期）を開始する。
10 月　新入生のオリエンテーション合宿を実施する。
通年　既存のカリキュラムの充実を図る。
通年　地域在住のシニアに対して体験入学の開催など、シニア大学を身近に感じさせる企画を実施する。
通年　募集パンフレットの配布先を検討する。
通年　CAAC を継続的に運営するため、学内関係各部署および学外協力者との調整を行う。

３．活動成果

上記活動計画に即し、中部大学アクティブアゲインカレッジ（シニア大学）を運営した。以下、経時的に活動とその成果を報告する。

1）４月に 3・4 期生の後期授業（春学期）を開始した。開講科目数および単位数は 3 期生 7 科目（12 単位）、4 期生 11 科目（12 単位）であった。
2）５月にＣＡＡＣ公開講座をグルッポふじとうにて開催。

3）5 月から新 1 年生（第 5 期生）を募集し、6 名を合格（面接試験は 7 月）とした。6 名が新たにシニア大学受講生となることとなった。

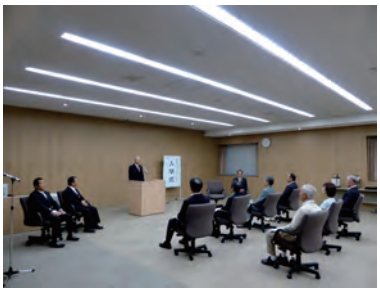
4）8 月に第 3 期生の修了式を挙行（修了認定の学習成果発表会は 7 月開催）した。19 名がシニア大学を修了し、「地域再生コーディネーター（CAAC カレッジ長認定）」の称号を得た。

5）同月にキャリア支援課と共催し介護職員初任者研修講座を開講した。シニア大学受講生 4 名、学部生 7 名が受講し、シニアおよび大学生は共学・共同して本講座に臨み全員が資格を取得した。

6）同月に修了生の会（同窓会）が開催され、今後の活動の確認と在校生も合わせた体力測定会を開催した。

7）9 月に 5 期生の入学式を行い、4・5 期生の前期授業（秋学期）を開始した。開講科目数および単位数は 4 期生 10 科目（15 単位）、5 期生 12 科目（13 単位）であった。また、新入生（5 期生）のオリエンテーション合宿を実施した。

8）CAAC 受講生と本学学部生とのさらなる接点つくりを目的として、カリキュラム改正等を検討するため運営委員会を 4 回（5 月・6 月・10 月・12 月）開催した。


［5 期生入学式］

［同入学式］

［5 期生オリエンテーション合宿］

［同合宿（朝のストレッチ体操）］

［授業風景（高齢者福祉と介護保険法）］

［同（旅と文学）］

［同（臨床医学：春日井市民病院）］

［公開講座（グルッポふじとう）］

［3 期生学習成果発表会］

［3 期生修了式］

［体力測定会］

［活動報告会（同窓会）］

4．補足

シニア大学開設の目的は、シニアが健康で生産性のある社会の一員として生涯現役生活を送ることができるように再学習の場を提供することと、シニアのこれまでの経験や知識、技術を直接的、間接的に学生に伝授していただく機会・場所を創造することである。

シニア大学は開学以来、入学者延べ 66 名、修了者延べ 43 名、在校生 18 名、研究生 5 名となった。徐々に知名度も向上しているように思われるが、入学者の増加に結び付いていない現状がある。今後、本学学生とのさらなる共学・協同を推進させるための運営をめざし、また募集活動方法の検討も最重要課題と考える。

３．新聞記事

50歳以上の「大学」開始控え体験講座

春日井で中部大

春日井市の中部大が五十歳以上を対象に開くシニア大学「アクティブアゲインカレッジ」を体験してもらう公開講座が二十四日、同市藤山台一のグルッポふじとうであった。

カレッジは九月に始まる二学期制で前期は二月まで、後期は四～七月。「健康・福祉」と「国際・地域・文化」の二コースがある。コースに沿った内容の六講座ずつに加え、両コース共通となる英語、ポルトガル語、中国語など語学入門、コンピューター入門など十講座がある。一年間で十五講座（単位）の修得を目指す。

簡単な英語のフレーズを学ぶ参加者たち＝春日井市のグルッポふじとうで

公開講座では、英会話入門を担当する外国人講師が「元気ですか」の質問に対する返答として、「腰が痛いです」「せきが出ます」などのフレーズを笑いを交えて紹介した。

シニア大学に通う同市高森台二の飯島富喜子さん（八七）は「毎日にめりはりがつきますし、授業で聞いたことを私なりに考えると記憶力が刺激されると感じます」と話した。

出願は六月二十九日まで。七月中旬に面接がある。入学料は五万円、授業料は年間二十四万円。問中部大＝〇五六八（五一）一七六三

2018年5月25日（金）　中日新聞

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

高蔵寺ニュータウン

高齢者の健康 学生が見守り

中部大で体力測定■体づくり指導も

丹羽さん（左）に健康に関するアドバイスをする学生たち

春日井市の高蔵寺ニュータウン（NT）の住民の健康増進や街の活性化に、近接する中部大学が一役買っている。入居開始50年を迎えたNTは高齢化が進み、65歳以上の割合を示す高齢化率は市全体を約9％上回る34％。「学生の学びと地域貢献の両方につながる」と街と関わる大学の取り組みを、住民も歓迎している。（中村亜貴）

「皆さんのお陰でよく眠れるようになった」。大学内の一室で、NTに住む丹羽久美子さん（66）は、野田明子教授（睡眠医学）の指導の下、動脈硬化のチェックをしてくれた学生に笑顔で語りかけた。

同大は地域活性化に貢献しようと、文部科学省の助成を受け4年前に高齢市民の希望者の体力測定会を開始。健康相談にも応じている。野田教授や臨床検査技師を目指す生命医科学科の学生らは、認知症予防のための物忘れ相談や睡眠の記録に基づく改善指導を実施。睡眠の乱れがあった丹羽さんは、アロマオイルにより、自律神経活動のバランスを整える効果が期待できる器具を借りていた。

助成は昨年度で終了したが、ここでの相談が病気の早期発見につながったこともあり、同大は独自に取り組みを続ける。4年中嶋穂乃佳さん(21)は「住民の方から健康面の質問を受けることもあり、こちらも頑張って勉強しなければ、という気持ちになる」。野田教授は「住民と接することは学生の学習意欲やコミュニケーション力向上にも役立つ。疾病予防分野で今後も地域に貢献したい」と語る。

5月には、NTに開所したばかりの交流センターで、スポーツ保健医療学科の尾方寿好准教授（運動生理学）らが、介護不要な体づくりを指導する「シニア健康クラブ」を始めた。

同月8日、同大非常勤講師や学生が住民6人に腰痛防止の体操などを教え、学生は手本を示しながら参加者を支援。住民の女性(71)は「痛めた膝のリハビリができる場所を探していた。NTに来てもらえてありがたい」と喜ぶ。スポーツインストラクター志望の4年黒川祐さん(21)も「仕事で高齢者に関わる機会もあると思うので、勉強になる。住民の健康維持を支援できればうれしい」と意欲的だ。

NTでは、高齢化に伴い高層階に空き室が増えたUR都市機構の賃貸住宅に、地域貢献活動への参加を条件に学生に格安で入居してもらう取り組みも行われている。現在約70人が入居し、運動会の準備や住民と交流するコーヒーサロンの運営などに関わる。同大学生支援課は「住民からも喜ばれている。学生の成長につながりこちらもうれしい」と話している。

2018年6月3日（日）　読売新聞

＊この記事・写真等は、読売新聞社の許諾を得て転載しています。

まち探訪

高蔵寺ニュータウン編 3

NT全域

中部大生 暮らして貢献

高蔵寺ニュータウン（NT）＝春日井市＝から約2キロ西にある中部大学では、地方出身の学生約70人が、NT内の賃貸住宅に住んで通学している。大学と都市再生機構（UR）が連携してつくった「地域連携住居」の制度を利用する学生たちで、NTの地域活動に参加することを条件に家賃が20％割引されている。高齢化が進む地域に若いパワーを入れ、元気な町にしたいと4年前に始まった。

NTにはUR賃貸集合住宅などの中層住宅が約100棟あるが、築30～50年と古い。エレベーターがなく、高齢の入居者が上層階の4、5階から次々と引っ越し、空き部屋が目立つ。階段の清掃や草刈りなどにも支障が出ているという。そこで4、5階の空き部屋を、学生に家賃を割り引いて貸し出している。

学生はNTとの連絡窓口となる「中部大学KNT創生サポーターズ CU＋（プラス）」に加入する。住民団体から大学を通してサポーターズに地域活動への参加要請があると、参加可能な学生が申し出る仕組みだ。学生は年平均6回は地域活動に参加するという。

サポーターズのリーダーを務める3年の八木恒行さん(21)＝岐阜県海津市出身＝は入学と同時に入居した。地域の運動会の手伝いや団地の清掃、防犯パトロールなどに参加し「実家を出て初めての1人暮らしで不安もあったが、入居者の方とも顔見知りになった。地域活動に参加するのは苦にならない」と話す。3年の辻合康志さん(20)＝長野県松本市出身＝は「初めは義務感で活動に参加していたが、仲間や顔見知りの住民ができ、居心地がよくなった」と満足そう。3年の金城星太さん(20)＝浜松市出身＝は「2DKで家賃3万4000円は魅力。さらに学校では学べない経験ができます」。メンバーたちは大学生活と地域活動をうまく両立させている感じだ。

一方、受け入れる側のNTの藤山台公団自治会長の星子浩さん(74)は「今夏の盆踊り大会には、学生さん約10人が準備段階から参加してくれ、本番では住民と一緒にやぐらの上で踊って交流した。住民が高齢化し、若い人が身近にいるのはとても心強い」と学生たちを歓迎する。「これからも若い人の発想や意見を参考にしていきたい」とさらなる連携に前向きだ。

地域活動が少なくなる冬の間には、学生たちは住民と交流しようと「コーヒーサロン」をNT内5、6会場で開き、学生がコーヒーを振る舞う。八木さんは「年配の方が出掛けてくれ、現役だった当時の話を楽しそうにしてくれる。私たちにも貴重な経験になっている」と活動に手応えを感じている。

＝つづく

地域活動について語る中部大生の（左から）金城さん、辻合さん、八木さん＝春日井市の高蔵寺ニュータウンで

2018年9月1日（土）　毎日新聞

＊この記事・写真等は、毎日新聞社の許諾を得て転載しています。

団地に住んで地域と輪

@キャンパス　中部大

秋も深まり、肌寒い11月の週末。高蔵寺ニュータウン（愛知県春日井市）にある団地の集会室で、中部大の男子学生６人が手際よくコーヒーをいれていた＝写真。テーブルを囲むお年寄りだけでなく、学生もこのニュータウンの住人だ。

「将来は何がしたいの？」「夢はいっぱいありますが決まってないですね」

定期的に各団地をめぐる「コーヒーサロン」はおしゃべりが尽きない。学生がサークル活動やアルバイトの楽しさを語れば、住人は活気にあふれた1970年代の団地の姿を懐かしそうに話す。参加した山田秀男さん（74）は「若い人と話すと楽しい」と目尻を下げた。

学生が暮らすのは、中部大と春日井市、都市再生機構（ＵＲ）が2015年から運用を始めた「地域連携住居」。２ＤＫなら家賃は３万円弱から。通常より２割安い。ＵＲの担当者は「空き家増加と高齢化が進むなか、学生が住めば活性化できる」と話す。春日井キャンパスまで自転車で最短15分ほどとアクセスもよく、約20人だった学生入居者は70人を超えた。

入居する上で最も大事な条件が、団地の自治会への参加だ。ゴミ拾いや祭りの手伝い、コーヒーサロン開催など行事ごとに１～３ポイントを設定。半年で最低５ポイントを獲得し、大学に報告する必要がある。学生支援課の殿垣博之さん（27）は「世代を超えた交流を通じ、大学で得られないものを学んでほしい」。

応用生物学部３年の金城星太さん（21）は半年で12ポイントと意欲的だ。40～70代の自治会ソフトボールチームの試合にもときどき出場する。「顔を覚えてもらい、参加すると『ありがとう』と言ってもらえる。うれしい」。団地暮らしが気に入っているようだ。

中部大は、入居する学生らを校名の頭文字から「ＣＵ＋（プラス）」と呼ぶ。ここでの経験が、いつかプラスになるかもしれない。（随時掲載）

2018年12月３日（月）　日本経済新聞

＊この記事・写真等は、日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。

ニュータウンに暮らす

51年目の高蔵寺

学生が入居 活気生む

④ 地域連携住居

地域活動の一環で草刈りに励む学生たち＝春日井市の旧西藤山台小で

春日井市の高蔵寺ニュータウン（NT）には、中部大（同市松本町）の学生七十人が都市再生機構（UR）の賃貸住宅に暮らしている。中部大とUR、市が連携した「地域連携住居」制度の取り組みで、主に県外出身者の学生が利用している。家賃は20％引きで2DK二万七千八百円からとお得だが、利用には、地域活動に参加することが条件だ。

地域連携住居は二〇一五年、NT周辺の活性化を目指す市と空き家問題を抱えるURが、NTから約二キロほど離れた中部大と協力して始まった。

賃貸住宅は築三十～五十年と古く、エレベーターが無いため特に上層部の空き家が目立つ。学生たちは、学校に近い藤山台、岩成台、中央台地区の集合住宅の四、五階に住んでいる。

利用する学生たちは「中部大KNT創生サポーターズ　CU＋（シーユープラス）」と呼ばれ、地域から親しまれている。学生リーダーを務める三年の八木恒行さん（二）＝岐阜県海津市出身＝は「いろんな人と話ができてあいさつもしてくれる。住んでいて心地よいです」と笑顔で話す。

地域の住民は大学を通し地域活動の参加を要請、可能な学生が応じる仕組みになっている。活動時間や仕事量によって大学がポイントを決め、学生たちは一年の前半、後半の学期でそれぞれ五ポイントを目安に活動に取り組む。

十一月中旬、NTの旧西藤山台小学校で行われた「クリーン大作戦」には二十六人の学生たちが参加。校庭の草刈りやごみ拾いなどに励んだ。事務局として学生たちの参加を依頼した首藤満寿さん（七）は「若い人がいるといないとでは、活気が全く違う。本当に頼もしい」と喜ぶ。

今年四月に入居した一年の小田智也さん（一八）＝静岡市出身＝は「初めは話し方がわからず不安だったが、活動に出ると顔見知りになり近い存在になる」と話す。実際に高齢者たちからも「若い人たちと話すのは、孫のようでうれしい」という反応もあるという。

地域活動への参加以外に、秋から冬にかけて学生たちが主体となり月に一度コーヒーサロンを開いている。副リーダーで三年の辻合康志さん（二）＝長野県松本市出身＝は「高齢者は若者を敬遠している印象があったが、実際は違った。今はすごくまちに愛着がある。もっといろんな世代と交流していきたい」と語る。

来年度リーダーを務める二年の西井皓祐さん（一九）＝三重県鈴鹿市出身＝も「活動参加を義務感でやるのではなく、地域を盛り上げようと楽しみながらやれる人を増やしたい」と積極的な姿勢を見せる。

（丸山耀平）

2018年12月15日（土）　中日新聞

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

中部大生がアイデア弁当

きょうまで春日井　鉄分とカルシウム効率的に

春日井市の中部大で管理栄養士になるために学んでいる学生が考案したアイデア弁当を二十二日、同市松本町一のＪＡ尾張中央ファーマーズマーケット「ぐぅぴぃひろば」が販売した。二十三日も取り扱う。

鉄分とカルシウムを効率よく取れる食材を組み合わせた「鉄・カルアップ弁当」。年齢が上がるとなりやすい貧血と骨粗しょう症の予防を狙う。

主菜は、サバのマリネとチキングリルのトマトソースの二種類から選べ、どちらも鉄分やカルシウムの吸収を高めるビタミンＣやタンパク質などを含む。ひじきや桜エビ、枝豆を入れたまぜご飯、小松菜のソテーなど四種の副菜、ゴマプリンを添えた。

中部大とＪＡ尾張中央の連携協定の一環で、九月から管理栄養科学専攻の一年生八人がメニューを考えてきた。笠原涼佑さん(二十)は「鉄分とカルシウムを効率的に摂取できる弁当は少ないと思うので、いろんな世代の人に食べてほしい」と話していた。調理法も紹介している。

二十三日の弁当販売は午前九時～正午。二種の主菜ごとに四十個限定で八百円。(丸山耀平)

考案した弁当をアピールする学生たち＝春日井市のＪＡ尾張中央ファーマーズマーケット「ぐぅぴぃひろば」で

2018 年 12 月 23 日（日）　中日新聞

＊この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（平成 25 年度採択）
『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業』
2018（平成 30）年度　成果報告書

発 行 日　　2019（平成 31）年 3 月

編集発行　　中部大学　研究推進事務部ＣＯＣ推進課
〒487-8501　愛知県春日井市松本町 1200 番地
電話：0568-51-1763　FAX：0568-51-4659
http://www3.chubu.ac.jp/coc/

印 刷　　木野瀬印刷株式会社
〒486-0958　愛知県春日井市西本町三丁目 235 番地